

# 学園の臨床研究

Clinical Study of Campus Life

## 〈富山大学保健管理センター紀要〉

|                                      |                             |    |
|--------------------------------------|-----------------------------|----|
| 大学生におけるB型肝炎抗体                        | 松井祥子, 高倉一恵, 野口寿美, 北島 勲…………… | 1  |
| 発達障害大学生に対する支援                        | 西村優紀美……………                  | 5  |
| 情報通信技術を用いた交際相手からの暴力—日本における実態とその特徴の検討 | 竹澤みどり, 松井めぐみ……………           | 11 |

### ※※※※ Contents ※※※※

|  |  |    |
|--|--|----|
| Shoko Matsui, Kazue Takakura, Hitomi Noguchi and Isao Kitajima :   |  |    |
| Vaccination of Hepatitis B for Medical and Pharmaceutical Students .....   |  | 1  |
| Yukimi Nishimura :   |  |    |
| Support for university students with developmental disorders .....   |  | 5  |
| Midori Takezawa, Megumi Matsui :   |  |    |
| Investigating the state of intimate partner violence using information communication technologies in Japan ..... |  | 11 |

# 学園の臨床研究 Clinical Study of Campus Life

No.15 March 2016

## 〈富山大学保健管理センター紀要〉

|                                      |                             |    |
|--------------------------------------|-----------------------------|----|
| 大学生におけるB型肝炎抗体                        | 松井祥子, 高倉一恵, 野口寿美, 北島 勲…………… | 1  |
| 発達障害大学生に対する支援                        | 西村優紀美……………                  | 5  |
| 情報通信技術を用いた交際相手からの暴力—日本における実態とその特徴の検討 | 竹澤みどり, 松井めぐみ……………           | 11 |

## \*\*\* Contents \*\*\*

|  |  |    |
|--|--|----|
| Shoko Matsui, Kazue Takakura, Hitomi Noguchi and Isao Kitajima :   |  |    |
| Vaccination of Hepatitis B for Medical and Pharmaceutical Students .....   |  | 1  |
| Yukimi Nishimura :   |  |    |
| Support for university students with developmental disorders .....   |  | 5  |
| Midori Takezawa, Megumi Matsui :   |  |    |
| Investigating the state of intimate partner violence using information communication technologies in Japan ..... |  | 11 |

# 大学生における B 型肝炎抗体

富山大学保健管理センター<sup>1)</sup> 富山大学保健管理センター杉谷支所<sup>2)</sup>  
松井祥子<sup>1)</sup>, 高倉一恵<sup>2)</sup>, 野口寿美<sup>2)</sup>, 北島 勲<sup>2)</sup>

Vaccination of Hepatitis B for Medical and Pharmaceutical Students

Shoko Matsui, Kazue Takakura, Hitomi Noguchi and Isao Kitajima

## 要旨

医薬系の実習における感染予防対策を目的として、医薬系キャンパスの学生に対して、B型肝炎ワクチン（以下 HB ワクチン）による予防接種を行った。その結果、1シリーズのHB ワクチン後には、98.5%に抗体が獲得された。しかし接種後1～2年すると、抗体が基準に満たないものが多く認められる事が判明した。

2015年に公表された医療従事者に対する感染予防のガイドラインでは、肝炎抗体は一度抗体が獲得されれば、その後は長期にわたり発症予防効果が続くことや、経年により抗体価が基準値以下に低下しても発症予防効果は続くことから、HB ワクチンの追加接種は不要となった。しかし、今回の検討にて予想以上の抗体減衰を認めたことから、今後も感染予防を徹底した慎重な実習が望まれる。

## 【はじめに】

B型肝炎ウイルスは感染力が強いウイルスとして知られており、血液のみならず、唾液などの分泌液からの感染も報告されている。したがってすべての医療従事者や医療系学生にとって、B型肝炎ワクチン（以下 HB ワクチン）による感染予防が非常に重要である。

富山大学医薬系キャンパスでは、実習における感染予防の目的で、入学時にB型肝炎と4種感染症の抗体検査を施行し、抗体陰性者にワクチン接種を勧奨している。今回、当施設におけるB型肝炎ワクチン接種について、接種結果ならびに追加接種の効果について検討を行ったので、若干の考察をふまえて報告する。

## 【対象と方法】

対象は、20XX年から20X(X+5)年までの5年間に於いて、HBs抗体検査およびHB ワクチン

接種を実施した学生1223名である。HB ワクチンは、組み替え沈降B型肝炎ワクチン「ビームゲン®」（化学及血清療法研究所：以下 化血研、熊本）を用い、0.5mlを1シリーズ3回（初回、1ヶ月後、6ヶ月後）上腕に皮下注射（もしくは筋肉内注射）した。HB ワクチン接種後の抗体検査は最終接種から約1ヶ月後に施行し、PHA法にて8倍以上を陽性とした。

さらに1シリーズの接種後において抗体が陰性である者を追加接種対象者として、希望者に対して初回から約12ヶ月後に追加接種を1回行い、その約1ヶ月後に抗体検査を施行した。

また201(X+4)年および20(X+5)年に、肝炎ワクチン1シリーズ施行後2年ないし3年を経た学生の希望者272名を対象として、PHA法による肝炎抗体検査を施行した。

なお統計解析はカイ2乗検定を行い、 $P < 0.05$ を有意とした。

## 【結果】

接種者の1クール施行後の平均抗体陽性率は、98.5%であった。また各年度における抗体陽性率には、大きな変化を認めなかった(表1)。また、1シリーズ後に抗体陰性であった計18名に対して追加接種を勧奨し、17名が1回の追加接種を行った。その結果、陽転化が得られなかった者は8名(追加接種者の47%、全体の0.7%)であった(表2)。

表1 1クール後のB型肝炎抗体の陽性率

| 年度       | %    |
|----------|------|
| 201(X+1) | 98.8 |
| 201(X+2) | 99.2 |
| 201(X+3) | 98.3 |
| 201(X+4) | 97.9 |
| 201(X+5) | 98.0 |

表2 1クール後の追加接種者数と接種結果

| 年度       | 対象者数 | 追加接種希望者数 | 陽性者数 | 陰性者数 |
|----------|------|----------|------|------|
| 201(X+1) | 3    | 2        | 1    | 1    |
| 201(X+2) | 2    | 2        | 1    | 1    |
| 201(X+3) | 4    | 4        | 2    | 2    |
| 201(X+4) | 5    | 5        | 3    | 2    |
| 201(X+5) | 5    | 5        | 3    | 2    |

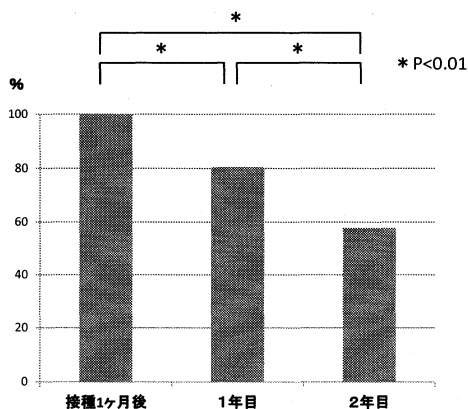
一方、1シリーズ施行後に抗体陽性を確認した学生272名を対象に、陽転化2~3年後にあたる年度において、希望者に対して抗体陽性を再確認するために、肝炎抗体検査を実施した。その結果、全体での陽性者は178名(73.6%)、抗体陰性者は94名(34.6%)であった(表3)。年度別での比較では、201Y年の受験者140名中、抗体陰性者は37名(26.4%)、201(Y+1)年の受験者132名中、抗体陰性者は57名(43.2%)であり、前年度に比して次年度の抗体陰性者の割合が増加していた

( $P < 0.01$ )。また陽転化後の経年変化でみると、陽転後1年目で検査を行った者92名中、抗体陰性者は18名(19.6%)であったのに対して、2年目で検査を行った180名中、抗体陰性者は104名(42.2%)であり(図1)、有意に1年間で急速な陰転化が認められた( $P < 0.01$ )。

表3 抗体陽転後2-3年目の陽性率

| 年度       | 受検者数 | 抗体陽性者数 (%)  |
|----------|------|-------------|
| 201Y     | 140  | 103 (73.6%) |
| 201(Y+1) | 132  | 75 (56.8%)  |

図1 抗体陽性率の推移



## 【考察】

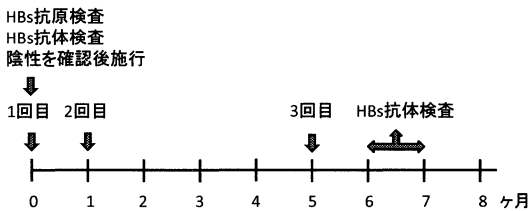
医療従事者は日常的に患者の血液などを扱う機会が多いため、感染症のリスクが高いと考えられている。特にHBV感染症は、HBe抗原陽性者の血液による針刺し事故が起こった場合に、感染率は約30%~50%ときわめて高率であることから、医療に従事する者にはできる限りの予防が必要である。またHBVは体液などからの感染も報告されているため、医療関連施設の事務職、ボランティアなど医療や介護や携わる関係者すべてがHBs抗体を獲得しておく必要があると考えられる。

現在、医療従事者については、一般社団法人日本環境感染学会が推奨するワクチンガイドライ

ンに準拠したワクチン接種勧奨が求められている。

この中で肝炎ワクチンに関しては、0、1、6ヶ月後の3回接種を1シリーズとして行い、3回目の接種終了後から1～2ヶ月後にHBs抗体検査を行い、10mIU/mL以上であれば免疫獲得とされる(図2)。本ワクチンの抗体獲得率は90%以上と高率であり、予防効果は高い。

図2 HB ワクチン実施スケジュール



しかしHBワクチンで産生された抗体は時間の経過とともに減弱し、接種後10年以上経過すると約50~70%の人において検出されなくなるとされていたため、従来は経時的にHBs抗体価を測定し、抗体価が低下したときに、追加のワクチン接種を行うことが推奨されていた。しかしこれまでの欧米を中心とする種々の調査から、肝炎抗体は一度抗体が獲得されれば、その後は長期にわたり発症予防効果が続くこと、また経年により抗体価が基準値以下に低下した場合も発症予防効果は続くことが判明したため、2014年12月に公表された米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention: 疾病管理予防センター)のガイドラインでは、追加接種は不要であることが明示された<sup>1)</sup>。これらのガイドラインの改訂を受けて、日本環境感染学会でも同様の内容を明記し、2014年10月に「医療関係者のためのワクチンガイドライン 第2版」として公表した<sup>2)</sup>。

当大学の結果においては、1クール後の抗体獲得率は98%と高率であり、従来の報告と一致していた。また1回の追加接種にて免疫を獲得できなかった者は、0.7%と低率であった。当施設では、

ガイドラインに沿って2シリーズ目を行う場合は、附属の医療機関への受診を勧奨するため、2シリーズ後の検討は行っておらず、最終的な抗体獲得率は明かではないが、HBワクチンによる予防効果は高いと推察される。しかし、その後の抗体陽性率は2年間で半減しており、陽転後の抗体価の減衰が著しいことが示唆された。従来、HBワクチンの予防効果は5年で80%前後、10年で60%前後に減衰する事が報告されている<sup>3)</sup>。今回の検討はまだ少数例であるが、調査対象者の抗体維持に関しては、従来の文献報告等より抗体保持がされにくいことが示唆された。当施設の抗体検査は、費用が安い半定量のPHA法を用いているため、より感度の高いEIAやCLIA法などの国際単位(IU/ml)での検査法への変更が必要と考えられる。しかし、減衰の原因はそれだけであろうか?

我々が2015年に報告したように、麻疹などにおいてもワクチン接種後の抗体価を維持できない現象が認められている<sup>4)</sup>。

最近の日本は、過剰ともいえる無菌環境であり、トイレなども世界で類をみない清潔さである。このような環境の中で、自然界からの外的刺激を受けずに育った青年層が、はたして幼時~学童期のワクチン接種のみで、種々の免疫を獲得しその抗体を維持できるのかどうかは、不明である。特にB型肝炎は、母子の垂直感染の予防効果により、近年の青年層にキャリアがほとんどいない現状であり、免疫を維持する環境にはない。各種感染症の抗体維持についての問題は、医薬系学部や教育実習系学部を併設する大学との情報交換を行いながら、今後も検証を重ねていく必要があると考えられた。

なお現在、国産のB型肝炎ワクチンは、ビームゲン®(製造販売:化血研)、ヘプタバックス-II®(製造販売:MSD株式会社)がある。しかし2015年、化血研が国の承認とは異なる方法で血液製剤やワクチンを製造していた問題が発覚し、2016年1月より110日間の業務停止となることが公表された。この現状から今後国内の供

給体制の悪化が予測されるため、日本小児科学会は、母子感染や針刺し事故後の発症の予防など優先的な接種事項を設ける必要があるとの見解を公表した。

2008年にも、当時広く使用されていた明乳のワクチンが、医薬品の製造管理及び品質管理に関する調査（GMP調査）において、生産ラインの無菌性保証に関する問題点を指摘されたため以後ワクチンの製造から撤退し、その結果肝炎ワクチンは一時的な品不足に陥った。今回の厚労省による化血研の業務停止命令後もしくは、供給体制に問題が生じる恐れがある。医薬系の学生の場合、1年次からの早期臨床体験実習などがあるため、実習等においても、感染予防が困難になることが予想される。行政においては、ワクチン製造に関する厳重な監視と共に、供給等に関する危機管理対策を切に望みたい。

#### 【結語】

B型肝炎ワクチンを1クール接種した大学生において、そのHBs抗体価を測定した。その結果、1クール施行後の抗体獲得は高率であったが、陽転後の抗体減衰者も多かった。米国CDCのガイドラインでは、免疫獲得者のB型肝炎予防効果は長期にわたって持続するとされているが、今回の調査において抗体の減衰が急速であることから、感染予防を徹底した慎重な実習体制が必要と考えられた。

#### 【文献】

- 1) CDC guidance for evaluating health-care personnel for hepatitis B virus protection and for administering post exposure management. MMWR 2013;62 (No.RR-10).
- 2) 「医療関係者のためのワクチンガイドライン 第2版」. 日本環境感染学会誌 2014;26:Suppl.
- 3) Huang LM, Chiang BL, Lee CY, et al. Long-term response to hepatitis B vaccination and response to booster in children born to mothers with hepatitis B e antigen.

Hepatology. 29:954-9, 1999.

- 4) 松井祥子, 高倉一恵, 野口寿美, 他. 大学生における麻疹・風疹抗体価の推移. 学園の臨床研究 14: 1-4, 2015

# 発達障害大学生に対する支援

西村優紀美

Support for university students with developmental disorders

Yukimi Nishimura

## 1. 障害学生支援

2016年度から施行される「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」により、高等教育機関においても障害学生への差別的取り扱いの禁止が法的義務となり、合理的配慮の提供に関しては、国・地方公共団体は法的義務、民間事業者においては努力義務となった。2012年に文部科学省が公開した「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」では、合理的配慮の決定過程の考え方として「（前略）権利の主体が学生本人にあることを踏まえ、学生本人の要望に基づいた調整を行うことが重要である」としている。このような社会的情勢の中で、大学では「障害を理由とする差別の解消の推進に関する教職員対応要領」を作成し、対応要領における具体的な留意事項を明記する必要性がでてきた。

独立行政法人日本学生支援機構（以下、機構）が2015年3月に公開した「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告」<sup>1)</sup>があり、支援障害学生数が2013年度では2006年度の3.1倍に達しており、中でも発達障害学生の支援学生数の増加が顕著であるという結果が出ている。機構が行った2014年度の全国の大学、短期大学及び高等専門学校を対象に障害のある学生の修学支援に関する実態調査<sup>2)</sup>によると、「発達障害（診断有）」は2,722人であり、このうち学校に支援の申し出があり、学校が何らかの支援を行っている支援学生数は1,856人であった。

## 2. 発達障害学生の支援ニーズと合理的配慮

ASDにおいて採用された「スペクトラム」（連続体）の概念は、「障害」と「障害までに至らない個性」との間に絶対的な境界線が引かれているものではない。ASDだけでなく、ADHDやSLD、DCDの特性においても状態像には連続性があり、特性が問題を誘発することもある一方で、状況によっては大きな困難さとして表現されず個性の範囲として認識される場合もあり、場合によっては特異な優れた能力として表現される場合もある。

2001年に世界保健機構（WHO）が発表した「国際生活機能分類：ICF」では、人間の生活機能と障害に関する新しい分類法として、「環境要因」等の観点を加え、人の心身機能や障害の状態が環境によって変化し、その人がどのような環境で生活するのかによって、日々の活動や社会参加の状態は異なってくるという考え方を示した。支援ニーズは障害者の障害名に固定的にあるのではなく、障害者の生活の中で、周囲の環境や人々との関係性によって多彩な様態を示すものであり、関係するすべての人々が当事者として自我関与する中で浮かび上がってくるものと捉えることができる。

平成25年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が制定され、平成28年4月より施行される予定である。この法律は、平成18年に国連総会で採択され、日本が平成19年に署名した「障害者の権利に関する条約」（障害者権利条約）を踏まえ、平成23

年に改正された障害者基本法第4条の「差別的禁止」に関する基本原則をより具体化したものである。この法律の第7条は、「行政機関等における障害を理由とする差別的禁止」及び「合理的配慮」に関して言及している。合理的配慮に関しては、「障害を理由とする差別的解消の推進に関する基本方針」の中で、「障害者からの現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合」に行われるとされている。さらに、「合理的配慮は、当事者と行政機関等の双方による建設的対話による相互理解の中で柔軟に対応がなされるものである」と明記され、さらに、「本人が自ら意志を表明することが困難な障害者に対して適切を思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかける必要がある」としている。つまり、発達障害者の支援ニーズを把握し、適切な配慮を行うためにも、障害のある当事者と教育関係者、支援者が対話を重ねていくことが前提となっているといえよう。

### 3. 発達障害学生に対する支援の流れ

富山大学では2007年度に、発達障害学生への支援を開始した。現在では「富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室（以下、支援室）」として組織化され、身体障害と発達障害、精神障害のある学生の修学支援を中核的に行う部署として認知されている。なかでも、発達障害学生の多彩な問題に対処するためには、ニーズ把握や支援方針・支援計画の策定、支援全体を見渡し調整していくためのマネジメントが必要不可欠であるため、その役割を担う常勤の支援者を配置した。支援室では、学生の成長モデルを基盤とした支援を目指しており、大学生活全体を通して「社会的関係の中で自立した主体として参加し、その中で自己実現を図っていくことを支援する」というミッションを掲げている。

支援の対象になる学生は、①オープンキャンパスの事前相談を経て入学し、入学直後から支援が開始される場合、②単位不足や留年などの問題が

発生し、教職員や保護者から支援依頼がある場合、③保健管理センターや「なんでも相談窓口」、キャリアサポートセンター等の支援部署から支援要請があり支援が開始される場合、④本人の自主来談など、いくつかの経緯でつながってくる。近年、入学直前直後に保護者から支援要請があり、早期に支援が開始されるケースが増え、今年度は昨年度の二倍近い人数が早期からの支援を開始している。

支援室では学生の面談を逐語録としてケースごとに詳細に記録している。記録は支援者間で閲覧し、相互に助言できるようになっており、記録を元に当該学生の状況を見取り、支援方針・支援方法に関する検証をしながら、適切な支援が行われるような仕組みを作っている。支援は障害名だけで支援方法が決まるわけではなく、多方面からの情報を統合し、障害特性が修学上の困難さにどのように現れてくるかを見極めながら必要な支援を行う必要がある、本稿で示した支援の開始から支援方針と支援方法の決定に至るプロセスが、学生の教育的ニーズに応えていく方法であると考えている。

#### (1) 初回面談

初回面談の目的は、大学での支援に必要な情報を得て、大学入学後にどのような支援ニーズがあるのかを見極めることである。面談では当該学生及び保護者の語りを引き出すための質問項目（表1）をあらかじめ準備しておくが、必ずしも一問

|              |             |     |                     |  |
|--------------|-------------|-----|---------------------|--|
| ふりがな<br>氏名   |             | 男・女 | 生年月日<br>年 月         |  |
| 学籍番号         | 所属<br>学部 学科 |     | 連絡先<br>(自宅)<br>(携帯) |  |
| ふりがな<br>住所 〒 |             |     |                     |  |
| E-mail       |             |     |                     |  |
| 家族構成         |             |     |                     |  |
| 生育歴          |             |     |                     |  |
| 相談歴          |             |     |                     |  |
| 診断           |             |     |                     |  |
| 通院歴・服薬の有無等   |             |     |                     |  |
| これまで受けてきた支援  |             |     |                     |  |
| 特徴的なエピソード    |             |     |                     |  |

Figure 1：初回面談における学生の情報



一答形式で進めるわけではない。

支援者はこれらの項目を念頭に面談を行うが、あくまでも当該学生及び保護者の自由な語りを尊重する態度を維持し、話のきっかけを作るための質問として、あるいは、話の流れの中でより詳細な情報を必要とする際に、焦点を当てるための質問として聴き取り項目を利用するという、半構造化面接により実施している。面談は学生と保護者同席の場合と、個別に行う場合があるが、いずれも支援者が複数で対応し、主に聴き取りを行う者と記録者という役割分担で対応する。面談時間は約60分である。

**(2) 暫定的な支援方針の決定**

初回面談での聞き取り内容をもとに情報を集約し、当該学生の見立てを行い、暫定的な支援方針を決定していく。その際、表2の項目に沿って情報をまとめていくが、情報をどのように見立てとしてまとめ上げていくか、また、面談での行動観察をどのように解釈するかが非常に重要なポイントになってくる。複数の支援者の総合的な意見を踏まえ、暫定的な支援方針を決め、2～3回の支援状況を判断材料にしながら、より適切な支援方針として作り上げていく。

| ■面談から得られた情報の集約・見立て         |  |
|----------------------------|--|
| 面接時の行動観察                   |  |
| 家族の理解                      |  |
| 本人の障害特性に対する自己理解の程度・障害受容の程度 |  |
| 協力体制の有無                    |  |
| 初期支援で特徴的なエピソード             |  |
| 暫定的な支援方針                   |  |

Figure 2：情報の集約と整理

**(3) 情報共有の範囲**

暫定的な支援方針の決定と平行して、学部教職員との連携の方法と情報開示の範囲を話し合うことも初回面談では重要になる。当該学生及び保護

者との話し合いで、①定期面談による支援に関する了解、②支援に当たり学部教職員との情報共有に関する意見交換と了解、③情報共有の範囲（助言教員のみ、授業担当教員のみ、学科教員、学部教員等）、④情報の範囲（障害名を伝える、障害名を言わず修学上問題となり得る特性のみを伝える、配慮内容のみ等）、⑤依頼文書の必要性と許可、⑥修学状況を見て必要があれば再度検討することの了解等、今後の支援の方法についての約束事を確認する。

**(4) 配慮願い**

初回面談による情報と行動観察を踏まえた上での見立てをもとに、本人及び保護者の希望があった場合、教員に対する配慮願いを作成する。内容は、①支援につながった経緯、②障害特性、③面談での様子、④支援室での支援内容、⑤配慮の内容・方法、⑥予想される困りごと、⑦困りごとへの対処方法、である。なお、配慮内容に関しては、本人及び保護者と一緒に検討し、配慮以来の範囲についても学生の意思を尊重するプロセスをとっている。

**(5) 前期終了後の支援会議**

前期終了後に、支援者と指導教員（助言教員）が支援内容及び支援方法について振り返りを行うが、授業担当者からの感想も聞き取り、後期に向けての配慮を検討していく。支援者は学生との面談の様子や、支援の成果を教員に報告するとともに、支援結果を整理する中で、学生自身の変容を伝えていく。

授業に関する配慮は、実際に授業を担当する教員の感想や意見を反映しつつ、当該学生の障害特性への配慮として十分なものでなければならない。

**4. 発達障害大学生に対する合理的配慮の探求プロセス**

大学等における合理的配慮とは「障害のあるものが、他の者と平等に教育を受ける権利を享受・

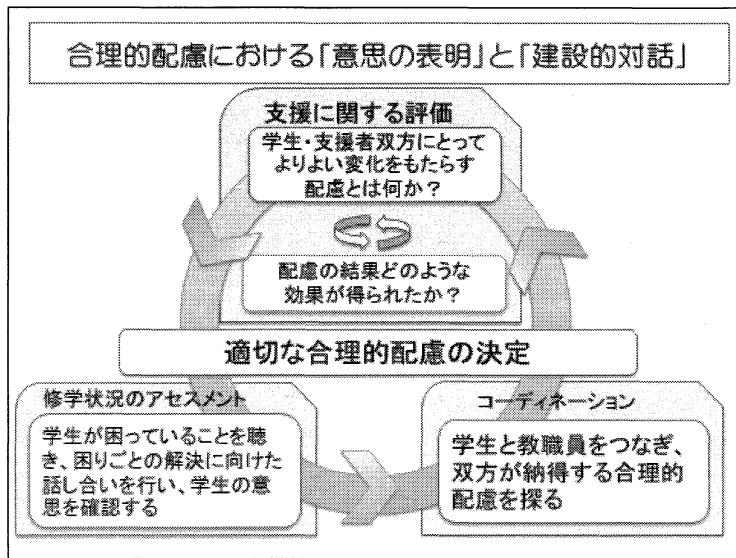


Figure 3：合理的配慮の探求プロセス

行使することを確保するために、大学等が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある学生に対し、その状況に応じて、大学等において教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり、かつ「大学等に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」とされている。2012年に文部科学省が公開した「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」では大学等において提供すべき合理的配慮の考え方が示され、合理的配慮の決定過程の考え方として「(前略)権利の主体が学生本人にあることを踏まえ、学生本人の要望に基づいた調整を行うことが重要である」とされ、権利の主体者である学生と支援者との「建設的対話」の必要性が明記されている。

発達障害学生への支援は、障害特性のあらわれ方が一人ひとり異なるため、配慮内容を定型化することが難しく、修学上配慮が必要と思われる場合でも学生本人から主体的な配慮要請を期待することが難しいという問題がある。配慮の必要性を支援者だけが認識し、学生の合意なしに配慮提供を行った場合「学生を権利の主体とする」観点が見失われる。また、学生が自分の判断で配慮を要請

し、大学は配慮提供の可否のみを返答するような対応は、意思表示の困難な発達障害学生に対しての配慮が欠如しているとみなされる。発達障害学生の意思表示の困難さの多くは「実際の問題と、自身の障害特性を関連づけることの難しさ」と、「さまざまな状況を把握し整理して、自分の考えをまとめあげることの苦手さ」等に起因するため、合理的配慮の提供には本人の意思決定過程を支援するという考え方を採用する必要がある。具体的には、困っている状況と一緒に整理し、何が問題で、自分には何ができるのか、あるいは問題の解消にはどのような配慮が必要なのか、そしてその配慮内容が適切であると判断できるのか等を検証していくプロセスが意思決定を支える支援となる。支援者は一つの考えに誘導したり指示・命令したりするのではなく、あるいは、すべてを学生の判断に委ねるのでもなく、学生が主体的に決めていくプロセスをサポートするという考え方を基盤におくことが重要である。

## 5. 合理的配慮の例

これまで述べてきたように、発達障害学生が修学上の困難さを感じた場合、それを「支援要請」

まじめに授業を受けているのですが、途中で講義内容がわからなくなっ  
てしまいます。このままでは単位を落としてしまうかもしれません。

### 自閉症スペクトラム障害の特性

言葉の意味に厳密で、講義内容で自分なりに気になる点があると、考え続けて  
しまい、授業に集中できなくなる。

### 支援に関するアセスメント

- ◆ 学生から困っている状況聞き、学生自身が工夫する点について話し合うと  
ともに、困難さの原因が障害特性によるものである場合、授業担当者への  
「配慮願い」について話し合う。
- ◆ 認知面の検査を行い、偏りがあるかどうかを検討する。
- ◆ 学科教員(教養教育担当教員も含む)、事務職員、支援者で支援会議を行  
い、本人の特性を伝え、有効な支援について検討する。

### 支援方法

- ICレコーダーの使用許可
- 許可された配慮の実行支援
- 配慮が有効かどうかの検証

Figure 4：自閉症スペクトラム障害の特性と支援内容（1）

実技科目はできるようになるまでに時間がかかります。  
練習する時間が欲しいです。

### 自閉症スペクトラム障害の特性

初めて体験することの習得に時間がかかる  
手先が不器用で、こまかな作業では力の加減がわからない

### 支援に関するアセスメント

- ◆ 実技実習マニュアルがわかりやすいものであるか
- ◆ 行動観察による手指の巧緻性
- ◆ 実習内容に関する情報収集

### 支援方法

- アセスメント結果を学生と共有する
- モデルを示し、練習の機会を与える
- 補習の機会、再試験の機会を多く与える

Figure 5：自閉症スペクトラム障害の特性と支援内容（2）

として自覚し、大学に依頼するというスタイルを取りにくい傾向がある。そのため、彼らの困り感を支援要請、適切な支援方法に敷きなおしていくプロセスが合理的配慮の決定には必要である。

図4は、同じ授業科目の単位を落としてしまい留年した学生支援事例である。

学生は「まじめに授業を受けているのですが、途中で先生の話に引っかかり、過去の記憶をたどっているうちに、授業が進んでしまいます。どうしても言葉の定義に引っかかってしまうので、集中が途切れてしまいます」と語った。これは、自閉症スペクトラム障害の特性によるものである

と予想されたため、認知特性に関するアセスメントを行い、その結果を受けて、本人と有効な対策を練ることになった。しかしながら、本人の努力や心がけだけではうまくいかないため、授業担当教員を含めての支援会議を開き、有効な支援について意見交換を行った。その際、支援者の専門的な見地から考えられる配慮事例を提案し、ここではICレコーダーで録音し、それを聞きながら復習をするという案が暫定的に出された。支援方法が当該学生にとって有益であるか検証を経て、当該学生に対する合理的配慮は、①ICレコーダーの持ち込み、②許可された配慮が適切に実行されるための支援であるという結果となった。

図5は実験・実習等の実技科目で失敗することが多く、単位を落としてしまったという学生のケースである。学生はまじめに取り組むが、器具を破損したり、手順を間違えてしまったりすることがあった。学生は、「実技科目はできるようになるまで時間がかかります。小さい時から不器用で、注意されることが多かったです。でも、良いモデルを観察させてもらったり、何度も挑戦させてもらったりするとうまくいくこともありました。大学でも練習する時間がほしいです」と語った。このケースでは、本人の困り感が障害特性によるものであると判断し、アセスメントを行い、「再チャレンジの機会を多く与える」という配慮が実行された。

## 6. おわりに

発達障害学生が障害特性による不利益がないような教育環境を、どのようなプロセスで作り上げていくかが大きな課題である。筆者は、支援者と本人との対話の中から本人が納得するより良い状況と一緒に探し出していくというプロセスが非常に重要であると考えている。支援者は、学生が自覚しにくい自分自身の困難さと支援ニーズを、試行錯誤を繰り返す中で自己認識していくことそのものを支援するという役割がある。教育保障に関わる合理的配慮は、本人の意思の表明が重要なポイントであることは先にも述べたが、本人の意思

の表明が、支援者の誘導や説得による半ば強制的に決断を迫るものであってはならない。「本人の意志決定を支える」という支援の在り方について、慎重に検討していく必要がある。

## 引用文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構 (2015) 大学短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査分析報告.
- 2) 独立行政法人日本学生支援機構：平成26年度(2014年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書, pp.57-62.2014.
- 3) 西村優紀美, 桶谷文哲, 日下部貴史 (2015) 発達障がい学生に対する入学直後の支援の在り方について～支援開始直後から支援方針の決定までのプロセス～. 全国高等教育障害学生支援協議会論文集.

## 情報通信技術を用いた交際相手からの暴力—日本における実態とその特徴の検討

富山大学保健管理センター 竹澤みどり

岡山大学学生支援センター 松井めぐみ

Investigating the state of intimate partner violence using information communication technologies in Japan

Midori Takezawa (Center for Health Care and Human Sciences, University of Toyama)

Megumi Matsui (Student Support Center, Okayama University)

キーワード：交際相手からの暴力，情報通信技術，インターネット，CMC

Key words: intimate partner violence, information communication technology, internet, CMC

### アブストラクト

インターネットや携帯電話をはじめとする情報通信技術 (ICT) の浸透によって、ICT を用いた親密なパートナーからの暴力 (IPV) が増えていることが指摘されている。本研究では、ICT を用いた IPV の日本における実態とその特徴を明らかにすることを目的とした。先行研究で指摘されている ICT を用いた IPV の主な 6 種の行為 (『言動監視』『執拗なメッセージ送信』『脅迫・侮辱』『なりすまし』『私的情報等による攻撃』『私的情報の掲載』) の被害経験の有無に加え、各行為の詳細、影響、対処について自由記述調査を行った。その結果、『言動監視』が最も経験頻度が高く、現在の恋人からのみではなく、元恋人からされる場合も多いことが明らかとなった。気持ちへの影響として「嫌・不快」「気持ち悪い」「怖い」が多く、行動への影響は「行動が制限される」「関係回避」の回答が多い一方で、「影響がない」という回答も多かった。対処としては「別れる」「話し合い」という対処がある一方で、何も対処を行わない場合も多いことが明らかとなった。

### 問題と目的

近年、情報通信技術 (information communication technology: ICT) の進歩は目覚ましく、日本においても急速に普及している。総務省 (2013) によると、2012 年末の「携帯電話・PHS」(スマートフォンを含む) 及び「パソコン」の普及率はそれぞれ 94.5%、75.8% であり、インターネット利用の人口普及率は 79.5% となり、6 割以上の人々が「毎日少なくとも 1 回以上」利用しているのが現状である。このような ICT の普及によって、コンピューターを介したコミュニケー

ション (Computer-mediated Communication: CMC) が一般的になっている。

当然、カップル間においても CMC が多く用いられていると考えられる。それに伴って、交際相手への暴力 (Intimate Partner Violence: IPV) に ICT が用いられることも増えている。Korchmaros, Ybarra, Langhinrichsen-Rohling, Boyd, & Lenhart (2013) が 10 代を対象に調査を実施した結果、過去 1 年間に CMC を介して交際相手に対して心理的暴力を行った経験のある人は、40.6% であった。さらに、Zweig, Dank,

Yhner, & Lachman (2013) のミドルスクールからハイスクールの学生を対象とした調査の結果、過去1年間で交際相手がいる（またはいた）人のうち26.3%が交際相手からのCyber abuseの被害経験があり、11.8%が交際相手への加害経験があることを報告している。しかし、ICTを用いたIPVについては、未だ研究が進んでいないのが現状であり (Melander, 2010)、日本においてもICTを用いたIPVに焦点を当てた研究はほとんどない。IPVには一致した操作的定義がないことが指摘されているが (Saltzman, 2004; Shorey, Cornelius, & Bell, 2008など)、概ね身体的暴力・心理的暴力・性的暴力の3つが含まれていることが多い (Shorey et al., 2008)。ICTを用いたIPVはオンライン上でのやり取りや様々なメディアを介して行われるため、そのほとんどは心理的暴力であると考えられる。ICTの発展の結果、執拗にメッセージを送信したり電話をすることで、時間や場所を問わずにパートナーに対する行動の監視や脅迫が可能となるなど、心理的暴力がさらに多様化し容易に行われるようになってきていると思われる。したがって、多様な心理的暴力の更なる理解の為に近年広まりつつあるICTを用いたIPVに関する詳細な調査研究が必要であろう。そこで、本研究では日本におけるICTを用いたIPVの実態とその特徴を把握することを目的とする。

ICTを用いたIPVには様々な行為が存在する。Bennett, Guran, Ramos, & Margolin (2011) は、大学生を対象としてカップル間に起こる電子メディアを通じた被害について検討している。具体的には、傷つけたり恐怖を与えたりするようなメッセージを直接送るなどの“敵意行為”、相手を監視したりするために電子メディアを使ったり、インターネット上の私的な情報にアクセスするためになりすまし行為をするなどの“侵入的行為”、困らせたり侮辱したりするような写真やコメントを公にアップするなどの“恥をかかせる行為”、電子媒体を用いたコミュニケーションを終わらせたり妨害するといった“排除行為”の4つのタイプの攻撃である。さらに、Zweig et

al. (2013) は、性的なCyber abuseと性的でないものに分けて検討している。性的なCyber abuseには、無理やり交際相手の裸のまたは性的な写真を送るよう強制したり、それに従わない場合にはメール等を用いて脅したり、逆に相手が望んでいないにもかかわらず自身の裸のまたは性的な写真を送りつけるといった行為が含まれる。性的でないCyber abuseには、交際相手を脅すようなメッセージを送る、交際相手のインターネットのアカウントを勝手に使う、交際相手のビデオを撮りそれを勝手に友達に送る、交際相手が身の危険を感じるほどに執拗にたくさんのメッセージを送る、交際相手を身体的に傷つけると携帯やメッセージ、SNSを用いて脅す、Facebookなどの自身のページに交際相手の悪口を書くなどの行為が含まれている。また、Burke, Wallen, Vail-Smith, & Knox (2011) はカップル間におけるICTを用いた監視やコントロールの加害・被害を測定する尺度を作成している。分析の結果、隠しカメラやスパイウェアを用いて交際相手の行動を監視したり、交際相手が嫌がるような交際相手の写真をウェブ上に載せると脅したり、実際に載せたりする「写真やカメラ、スパイウェア」、過度に電話をかけてきたり、メッセージを送信してきたりする「過度なコミュニケーション」、脅すような電話をかけてきたり、テキストメッセージを送信してくる「脅迫」、交際相手のパスワードを用いてパソコンをチェックしたり、携帯や電子メールの履歴をチェックする「チェック行為」の4因子が抽出されている。さらに、Helsper & Whitty (2010) は、既婚者を対象としてカップル間のオンライン上での監視行為について検討している。具体的には、相手の行動をチェックするために、「勝手に相手の電子メールを見る」「勝手に相手のSMS (ショートメール) を見る」「勝手に相手のブラウザ履歴を見る」「勝手に相手のIM (インスタントメッセージ) ログを見る」「勝手に監視ソフトを使う」「他人になりすます」などの行為である。これらの先行研究から、ICTを用いたIPVに含まれ得る行為は、大きく分けて以下

の6種の行為に分けられると考えられる。携帯やパソコン、インターネット上のサイト等を利用して、交際相手の言動を監視する『言動監視』、メールなどのテキストメッセージを執拗にたくさん送る『執拗なメッセージ送信』、交際相手を怖がらせたり、侮辱したり傷つけたりするような内容を、インターネット上の掲示板等へ書き込んだりメール等のテキストメッセージで送信する『脅迫・侮辱』、交際相手になりすまして、交際相手のメールやID等を勝手に用いて、困らせるようなことをする『なりすまし』、インターネット等を利用して交際相手の情報を探し出し、それを用いて相手を傷つけたり攻撃したりする『私的情報等による攻撃』、インターネット上に交際相手が嫌がるような情報や写真をアップするなどの『私的情報の掲載』である。

そこで、本研究ではこれら6種の行為の日本における実態を明らかにすることを目的とする。そして、交際相手や元交際相手からされた経験の有無に加え、具体的にどのようにその行為が行われたのか、その行為が受け手にどのような影響を与えたのか、それに対してどのような対処を行ったのかについても検討する。さらに、上記の先行研究は海外における調査であり、日本においては日本独自の行為が存在する可能性も考えられる。そこで、上記の6種の行為以外にも日本において行われている行為がないかについても検討を行う。

## 方法

### 調査対象者と手続き

本研究では、携帯やスマートフォン、インターネット上のSNSなどを用いた行為に関する調査である点をふまえて、インターネット調査を実施した。インターネット調査会社“NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社”の保有するモニターから、現在または過去に恋人がいる、またはいたことのある15歳から29歳の男女を対象にインターネット調査を実施し、回答が得られた473名（男性195名・女性278名）を分析対象とした。平均年齢は24.22歳( $SD=3.36$ )

であった。

### 調査内容

**ICTの利用** 1日の携帯電話やスマートフォンでの通話利用時間およびメールの送受信頻度について回答を求めた。通話時間に対する選択肢は、「1日に3時間以上」「1日に1時間以上3時間未満」「1日に30分以上1時間未満」「1日に10分以上30分未満」「1日に5分以上10分未満」「1日に1分以上5分未満」「それ以下での利用」「通話を利用していない」であった。メールの送受信に対する選択肢は、「1日に40件以上」「1日に30～39件」「1日に20～29件」「1日に10～19件」「1日に5～9件」「1日に1～4件」「週に3～4件位」「週に1～2件位」「それ以下での利用」「メール送信を利用していない／メール受信を利用していない」であった。また、1日のSNS (mixi, Twitter, LINE, GREE, モバゲータウン, Google+) 利用時間についてそれぞれ回答を求めた。選択肢は、「1日に6時間以上閲覧・投稿している」「1日に3時間以上6時間未満閲覧・投稿している」「1日に30分以上1時間未満閲覧・投稿している」「1日に30分未満閲覧・投稿している」「アカウントを持っているが、ほとんど利用していない」「アカウントを持っていない」であった。

**ICTを用いたIPVの被害経験** 以下の6つの行為に対する経験の有無について回答を求めた。「携帯やパソコン、インターネット上のサイトを利用して、あなたの言動をチェック（または監視）された事がある」（『言動監視』）、「執拗にたくさんメッセージを送られた事がある」（『執拗なメッセージ送信』）、「携帯メールやインターネット上の書き込み、メッセージ送信機能等を用いて、あなたを怖がらせたり、侮辱したり、傷つけたりするような内容のメッセージを送られた事がある」（『脅迫・侮辱』）、「あなたのメールやID等を用いて、あなたになりすまし、あなたを困らせるような事をされた事がある」（『なりすまし』）、「インターネットを使って、あなたの情報を探し出し、それを用いてあなたを傷つけたり攻撃されたりした事がある」（『私的情報等による攻撃』）、「イン

ターネット上に、あなたが嫌がるような情報や写真がアップされた事がある」(『私的情報の掲載』)。選択肢は、「恋人からされた事がある」「元恋人からされた事がある」「これまで恋人や元恋人からそのような事はされた事がない」(複数選択可であるが、「これまで恋人や元恋人からそのようなことはされたことがない」を選択した場合はそのほかの選択肢は選択不可)であった。

**ICTを用いたIPV行為の詳細** 各行為の詳細について、自由記述で回答を求めた。具体的には、『言動監視』についてはチェックの方法(『方法』)、『執拗なメッセージ送信』についてはメッセージを送られた頻度(『頻度』)およびその内容(『内容』)、『脅迫・侮辱』については使用された媒体(『媒体』)およびメッセージの内容(『内容』)、『なりすまし』については具体的な行為の内容(『行為内容』)、『私的情報等による攻撃』については利用された情報(『情報』)および具体的な行為の内容(『行為内容』)、『私的情報の掲載』についてはアップされた情報や写真(『アップ情報』)について回答を求めた。

**ICTを用いたIPVの受け手への影響** 各行為について、その行為によってどのような気持ちになったか(『気持ち』)、あなたの行動にどのような変化・影響があったか(『行動への影響』)につ

いて自由記述で回答を求めた。

**ICTを用いたIPVへの対処** その行為に対する対処(『対処』)について自由記述で回答を求めた。

**その他のICTを用いたIPV行為** 6種の行為以外で携帯やパソコン等のメール機能やSNS等を用いて、恋人や元恋人からされて嫌だった、怖かった、傷ついた行為について自由記述で回答を求めた。

**デモグラフィック情報** 性別、年齢、職業、居住形態について回答を求めた。

### 倫理的配慮

回答から個人が特定されることはないこと、研究目的以外に利用することはないこと、調査への協力は自由意思に基づくもので回答しなくても不利益をこうむることがないことをトップページに記載した。

### 調査時期

2012年11月2日から6日であった。

## 結果

### 調査対象者の属性およびICT利用状況

調査対象者は高校生21名(男性12名・女性9名)、専門学校生17名(男性8名・女性9名)、短期大学生4名(男性0名・女性4名)、大学生104名(男性47名・女性57名)、大学院生15名(男

Table 1 1日の携帯・スマートフォンの通話時間

|      | 通話を<br>利用していない |         | 1日に5分未満    |            | 1日に5分以上<br>10分未満 |          | 1日に10分以上<br>30分未満 |          | 1日に30分以上<br>1時間未満 |           | 1日に1時間以上<br>3時間未満 |          | 1日に3時間以上 |          |
|------|----------------|---------|------------|------------|------------------|----------|-------------------|----------|-------------------|-----------|-------------------|----------|----------|----------|
|      | 男性             | 女性      | 男性         | 女性         | 男性               | 女性       | 男性                | 女性       | 男性                | 女性        | 男性                | 女性       | 男性       | 女性       |
| 通話時間 | 8(4.1%)        | 4(1.4%) | 102(52.3%) | 146(52.5%) | 27(13.8%)        | 27(9.7%) | 15(7.7%)          | 24(8.6%) | 18(9.2%)          | 35(12.6%) | 17(8.7%)          | 25(9.0%) | 8(4.1%)  | 17(6.1%) |

Table 2 1日の携帯・スマートフォンのメール送受信頻度

|        | メール送受信を<br>利用していない |          | 週に0~4件    |           | 1日に1~9件    |            | 1日に10~19件 |           | 1日に20~29件 |          | 1日に30件以上 |          |
|--------|--------------------|----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|
|        | 男性                 | 女性       | 男性        | 女性        | 男性         | 女性         | 男性        | 女性        | 男性        | 女性       | 男性       | 女性       |
| メールの送信 | 6(3.1%)            | 10(4.4%) | 51(26.2%) | 65(23.4%) | 103(52.8%) | 163(58.6%) | 24(12.3%) | 22(7.9%)  | 7(3.6%)   | 17(6.1%) | 4(2.1%)  | 10(3.6%) |
| メールの受信 | 4(2.1%)            | 0(0.0%)  | 28(14.4%) | 24(8.6%)  | 91(46.7%)  | 154(55.4%) | 42(21.5%) | 53(19.1%) | 16(8.2%)  | 23(8.3%) | 14(7.2%) | 24(8.6%) |

Table 3 1日のSNSの利用時間

|          | アカウントを<br>持っていない |            | アカウントを持っているが<br>ほとんど利用していない |           | 1日に30分未満  |           | 1日に30分以上<br>1時間未満 |           | 1日に1時間以上<br>3時間未満 |          | 1日に3時間以上 |          |
|----------|------------------|------------|-----------------------------|-----------|-----------|-----------|-------------------|-----------|-------------------|----------|----------|----------|
|          | 男性               | 女性         | 男性                          | 女性        | 男性        | 女性        | 男性                | 女性        | 男性                | 女性       | 男性       | 女性       |
| mixi     | 75(38.5%)        | 84(30.2%)  | 53(27.2%)                   | 97(34.9%) | 51(26.2%) | 67(24.1%) | 11(5.6%)          | 14(5.0%)  | 4(2.1%)           | 9(3.2%)  | 1(0.1%)  | 7(2.5%)  |
| Facebook | 74(37.9%)        | 99(35.6%)  | 24(12.3%)                   | 32(11.5%) | 65(33.35) | 99(35.6%) | 23(11.8%)         | 25(9.0%)  | 6(3.1%)           | 16(5.85) | 3(1.5%)  | 7(2.5%)  |
| Twitter  | 75(35.5%)        | 93(33.5%)  | 31(15.9%)                   | 51(18.3%) | 49(25.1%) | 64(23.05) | 23(11.8%)         | 23(8.3%)  | 9(4.6%)           | 26(9.45) | 8(4.1%)  | 21(7.6%) |
| LINE     | 113(57.9%)       | 104(37.4)  | 19(9.7%)                    | 27(9.7%)  | 42(21.5%) | 81(29.1%) | 11(5.6%)          | 28(10.1%) | 7(3.6%)           | 26(9.4%) | 3(1.5%)  | 12(4.3%) |
| GREE     | 149(76.4%)       | 214(77.0%) | 35(17.9%)                   | 49(17.6%) | 4(2.1%)   | 6(2.2%)   | 3(1.5%)           | 4(1.4%)   | 3(1.5%)           | 3(1.1%)  | 1(0.5%)  | 2(0.1%)  |
| モバゲータウン  | 154(79.0%)       | 221(79.5%) | 29(14.9%)                   | 37(13.3%) | 5(2.6%)   | 8(2.9%)   | 1(0.5%)           | 5(1.8%)   | 4(2.1%)           | 4(1.4%)  | 2(1.0%)  | 3(0.1%)  |
| Google+  | 147(75.4%)       | 241(86.7%) | 30(15.4%)                   | 30(10.8%) | 9(4.6%)   | 4(1.4%)   | 6(3.1%)           | 2(0.7%)   | 1(0.5%)           | 10(4%)   | 2(1.0%)  | 0(0.0%)  |



性10名・女性5名), 会社員216名(男性83名・女性133名), 自営業17名(男性10名・女性7名), 無職25名(男性8名・女性17名), その他54名(男性17名・女性37名)であった。また, 一人暮らし160名(男性77名・女性83名), 家族と同居289名(男性113名・女性176名), その他24名(男性5名・女性19名)であった。

平均的な携帯電話やスマートフォンでの通話時間は男女ともに1日5分未満が最も多く, 調査対象者の約5割が1日5分未満と回答していた(Table 1)。メールの送受信は1日に1~9件が最も多く, 約7割の人が男女ともに1日に1回以上はメールの送受信機能を利用していた(Table 2)。また, SNSの利用に関しては, SNS利用者では1日に30分未満の利用時間が最も多く, 男女ともに約5割がFacebookやTwitterを利用していた(Table 3)。

### 各行為の経験頻度

各行為に対する経験の有無をTable 4に示した。『言動監視』に対しては男性の5.6%, 女性の10.4%が恋人から, 男性の10.3%, 女性の10.4%が元恋人からされた経験があり, 6つの行為のうち最も経験している割合が高かった。『執拗なメッセージ送信』に対しては男性の4.1%, 女性の1.1%が恋人から, 男性の8.2%, 女性の9.7%が元恋人からされた経験があった。『脅迫・侮辱』に対しては男性の3.1%が, 女性の0.4%が恋人から, 男性の4.1%, 女性の4.0%が元恋人からされた経験があった。『なりすまし』に対しては男性の1.5%,

女性の0.0%が恋人から, 男性の1.5%, 女性の0.7%が元恋人からされた経験があった。『私的情報等による攻撃』に対しては男性の2.1%, 女性の0.4%が恋人から, 男性の1.0%, 女性の1.4%が元恋人からされた経験があった。『私的情報の掲載』に対しては男性の1.0%, 女性の0.0%が恋人から, 男性の1.5%, 女性の2.2%が元恋人からされた経験があった。

### 言動監視

『言動監視』の具体的な方法と, この行為によってどのような気持ちになったか, この行為によって自身の行動にどのような影響があったか, どのような対処を行ったかを明らかにするためにそれぞれカテゴリー化を行った。具体的には, 臨床心理学を専門とする著者2名がKJ法を用いてカテゴリー化を行った。以下, カテゴリー化を行う場合は同様の方法を用いた。

方法 『言動監視』に対して, 恋人または元恋人からされた事があると回答した89名中75名が, 「どのような方法でチェック(または監視)されましたか」という設問に回答しており, 全記述数は79であった。それらをKJ法によってカテゴリー化した。その結果, 「その他」を含めて11カテゴリーが抽出された(Table 5-1)。SNS等のログイン時間や書き込みの時間を見ることで交際相手の行動をチェックする「SNS等のログイン時間のチェック」, インターネット上の書き込みを見て交際相手の言動をチェックする「SNSの内容のチェック - Twitter」 「SNSの内容のチェッ

Table4 各行為の経験頻度

|            | 恋人からされた事がある |           | 元恋人からされた事がある |           | これまで恋人や元恋人からされた事はない |            |
|------------|-------------|-----------|--------------|-----------|---------------------|------------|
|            | 男性          | 女性        | 男性           | 女性        | 男性                  | 女性         |
| 言動監視       | 11(5.6%)    | 29(10.4%) | 20(10.3%)    | 29(10.4%) | 167(85.6%)          | 221(79.5%) |
| 執拗なメッセージ送信 | 8(4.1%)     | 3(1.1%)   | 16(8.2%)     | 27(9.7%)  | 173(88.7%)          | 249(89.6%) |
| 脅迫・侮辱      | 6(3.1%)     | 1(0.4%)   | 8(4.1%)      | 11(4.0%)  | 183(93.8%)          | 266(95.7%) |
| なりすまし      | 3(1.5%)     | 0(0.0%)   | 3(1.5%)      | 2(0.7%)   | 190(97.4%)          | 276(99.3%) |
| 私的情報等による攻撃 | 4(2.1%)     | 1(0.4%)   | 2(1.0%)      | 4(1.4%)   | 190(97.4%)          | 273(98.2%) |
| 私的情報の掲載    | 2(1.0%)     | 0(0.0%)   | 3(1.5%)      | 6(2.2%)   | 191(97.9%)          | 272(97.8%) |

Table5-1 『言動監視』における「方法」の категория記述数

| カテゴリー名           | 男性        | 女性        | 合計         |
|------------------|-----------|-----------|------------|
| SNS等のログイン時間のチェック | 2 (8.0%)  | 9 (16.7%) | 11 (13.9%) |
| SNSの内容をチェック      |           |           |            |
| Twitter          | 3 (12.0%) | 8 (14.8%) | 11 (13.9%) |
| Facebook         | 2 (8.0%)  | 8 (14.8%) | 10 (12.7%) |
| mixi             | 2 (8.0%)  | 8 (16.8%) | 10 (12.7%) |
| 特定不能             | 5 (20.0%) | 4 (7.4%)  | 9 (11.4%)  |
| ネット上での交友関係のチェック  | 1 (4.0%)  | 4 (7.4%)  | 5 (6.3%)   |
| 名前を検索            | 1 (4.0%)  | 2 (3.7%)  | 3 (3.8%)   |
| ネット上で他人のふりをして関わる | 0 (0.0%)  | 2 (3.7%)  | 2 (2.5%)   |
| ID等を調べログインする     | 0 (0.0%)  | 2 (3.7%)  | 2 (2.5%)   |
| 携帯を見る            | 5 (20.0%) | 4 (7.4%)  | 9 (11.4%)  |
| その他              | 4 (16.0%) | 3 (5.6%)  | 7 (8.9%)   |
| 合計               | 25        | 54        | 79         |

ク - Facebook], 「SNSの内容のチェック - mixi」 「SNSの内容のチェック - 特定不能」, 交際相手がインターネット上で誰と交流しているかをチェックする「ネット上での交友関係のチェック」, 検索サイトに交際相手の名前を入力して得られる情報から交際相手の言動をチェックする「名前を検索」, 他人になりすまして交際相手の気持ちなどを知ろうとする「ネット上で他人のふりをして関わる」, 勝手にID等を調べられメールなどをチェックしたりする「ID等を調べログインする」, 勝手に交際相手の携帯のメールや送受信履歴をチェックする「携帯を見る」といった行為であった。

**気持ち** 『言動監視』に対して, 恋人または元恋人からされた事があると回答した89名中73名が, 「この行為によってあなたはどのような気持ちになりましたか」という設問に回答しており, 全記述数は91であった。KJ法の結果, 「その他」を含めて11カテゴリーが抽出された (Table 5-2)。「嫌・不快」, 「気持ち悪い」, 「何とも思わ

Table5-2 『言動監視』における「気持ち」の категория記述数

| カテゴリー名        | 男性        | 女性         | 合計         |
|---------------|-----------|------------|------------|
| 嫌・不快          | 7 (24.1%) | 19 (30.6%) | 26 (28.6%) |
| 気持ち悪い         | 1 (3.5%)  | 9 (14.5%)  | 10 (11.0%) |
| 何とも思わない       | 2 (6.9%)  | 8 (12.9%)  | 10 (11.0%) |
| 怖い            | 3 (10.3%) | 7 (11.3%)  | 10 (11.0%) |
| 面倒            | 4 (13.8%) | 4 (6.5%)   | 8 (8.8%)   |
| 相手から信用されていない  | 2 (6.9%)  | 3 (4.8%)   | 5 (5.5%)   |
| どちらかという嬉しい    | 2 (6.9%)  | 3 (4.8%)   | 5 (5.5%)   |
| 相手への不信任       | 2 (6.9%)  | 2 (3.2%)   | 4 (4.4%)   |
| ICT利用を制限しなければ | 0 (0%)    | 3 (4.8%)   | 3 (3.3%)   |
| ショック          | 1 (3.4%)  | 1 (1.6%)   | 2 (2.2%)   |
| その他           | 5 (17.2%) | 3 (4.8%)   | 8 (8.8%)   |
| 合計            | 29        | 62         | 91         |

ない」, 「怖い」, 「面倒」, 「相手から信用されていない」, 「どちらかという嬉しい」, 「相手への不信任」, 「ICT利用を制限しなければ」, 「ショック」といったカテゴリーであった。

**行動への影響** 『言動監視』に対して, 恋人または元恋人からされた事があると回答した89名中74名が, 「この行為によってあなたの行動にどのような変化・影響がありましたか」という設問に回答しており, 全記述数は74であった。KJ法の結果, 「その他」を含めて5カテゴリーが抽出された (Table 5-3)。書き込みやネット上での他者とのかかわりを控えたりといった「ICT利用制限」, 特に何の変化影響もなかったという「影響なし」, 気持ちが冷めたり, 距離を置くようになったりといった「相手への気持ちが冷めた」, 交際相手の見ることができないところで書き込みをしたり, 自分がICTを利用していないように交際相手に見せかけたりするといった「ICT利用を隠す」というカテゴリーであった。

Table5-3 『言動監視』における「行動への影響」の categoria記述数

| カテゴリー名      | 男性         | 女性         | 合計         |
|-------------|------------|------------|------------|
| ICT利用制限     | 10 (45.5%) | 18 (36.4%) | 28 (37.8%) |
| 影響なし        | 7 (31.8%)  | 14 (26.9%) | 21 (28.4%) |
| 相手への気持ちが冷めた | 1 (4.5%)   | 12 (23.1%) | 13 (17.6%) |
| ICT利用を隠す    | 3 (13.6%)  | 2 (3.8%)   | 5 (6.8%)   |
| その他         | 1 (4.5%)   | 6 (11.5%)  | 7 (9.5%)   |
| 合計          | 22         | 52         | 74         |

**対処** 『言動監視』に対して, 恋人または元恋人からされた事があると回答した89名中74名が, 「この行為に対して, あなたはどのような対応・対処を行いましたか」という設問に回答しており, 全記述数は76であった。KJ法の結果, 「その他」を含めて8カテゴリーが抽出された (Table 5-4)。

Table5-4 『言動監視』における「対処」の categoria記述数

| カテゴリー名   | 男性        | 女性         | 合計         |
|----------|-----------|------------|------------|
| ICT利用制限  | 8 (36.4%) | 17 (31.5%) | 25 (32.9%) |
| 対処しない    | 5 (22.7%) | 13 (24.1%) | 18 (23.7%) |
| ICT利用を隠す | 4 (18.2%) | 7 (13.0%)  | 11 (14.5%) |
| 別れた      | 0 (0.0%)  | 7 (13.0%)  | 7 (9.2%)   |
| 話し合い     | 1 (4.5%)  | 4 (7.4%)   | 5 (6.6%)   |
| 無視       | 1 (4.5%)  | 4 (7.4%)   | 5 (6.6%)   |
| 謝る       | 2 (9.1%)  | 0 (0.0%)   | 2 (2.6%)   |
| その他      | 1 (4.5%)  | 2 (3.7%)   | 3 (3.9%)   |
| 合計       | 22        | 54         | 76         |

行動への影響と同様に書き込みをしないようにしたなどの「ICT利用制限」、何もしていないといった「対処しない」、ロックをかけるなどICTを利用していることを交際相手から隠す「ICT利用を隠す」、「別れた」、発言の意図を説明したりと対話によって解決を試みる「話し合い」、放っておいたり知らないふりをしたりといった「無視」、「謝る」といった対処であった。

### 執拗なメッセージ送信

どのくらいの頻度でメッセージを送られたか、どのような内容のメッセージであったかに加え、『言動監視』と同様にこの行為によって引き起こされた気持ち、行動への影響、対処について、それぞれカテゴリー化を行った。

**頻度** 『執拗なメッセージ送信』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した54名中41名が、「どのくらいの頻度でメッセージを送られましたか」という設問に回答していた。数分ごとが14.6%，1日に10～50通程度が29.3%，1日に数通程度が17.1%，毎日が14.6%，週に1～3回程度が7.3%，月に1,2回程度が7.3%であった。

**内容** 『執拗なメッセージ送信』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した54名中42名が、「どのような内容のメッセージを送られましたか」という設問に回答しており、全記述数は53であった。KJ法の結果、9カテゴリーが抽出された (Table 6-1)。「居場所・行動を問う」、「なぜ返信をくれないのか」といった「連絡の要求」、別れ際や別れた後に「復縁を求める」、

Table6-1 『執拗なメッセージ送信』における「内容」のカテゴリー記述数

| カテゴリー名     | 男性        | 女性        | 合計         |
|------------|-----------|-----------|------------|
| 居場所・行動を問う  | 5 (22.7%) | 9 (29.0%) | 14 (26.4%) |
| 連絡の要求      | 2 (9.1%)  | 4 (12.9%) | 6 (11.3%)  |
| 復縁を求める     | 2 (9.1%)  | 2 (6.5%)  | 4 (7.5%)   |
| かかわり希求     | 4 (18.2%) | 3 (9.7%)  | 7 (13.2%)  |
| 自傷・他害による脅し | 2 (9.1%)  | 1 (3.2%)  | 3 (5.7%)   |
| 愛情表現       | 1 (4.5%)  | 2 (6.5%)  | 3 (5.7%)   |
| 非難         | 1 (4.5%)  | 2 (6.5%)  | 3 (5.7%)   |
| 自身の近況報告    | 0 (0.0%)  | 2 (6.5%)  | 2 (3.8%)   |
| その他        | 5 (22.7%) | 6 (19.4%) | 11 (20.8%) |
| 合計         | 22        | 31        | 53         |

“もっと話がしたい”“会いたい”といった「かかわり希求」、「自殺してやる”(交際相手の大切な人を) 傷つける”と脅迫する「自傷・他害による脅し」、「好き”やどのくらい交際相手を好きかを言う「愛情表現」、交際相手の言動を攻めたり見下すような「非難」、「自身の近況報告」であった。

**気持ち** 『執拗なメッセージ送信』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した54名中44名が、「この行為によってあなたはどのような気持ちになりましたか」という設問に回答しており、全記述数は57であった。KJ法の結果、「その他」を含めて11カテゴリーが抽出された (Table 6-2)。「鬱陶しい・面倒」、「不快」、「気持ち悪い」、「怖い」、「辛い」、「相手が嫌いに」、「相手から信用されてない」、「複雑」、「何も感じない」、「申し訳ない」であった。

Table6-2 『執拗なメッセージ送信』における「気持ち」のカテゴリー記述数

| カテゴリー名      | 男性         | 女性         | 合計         |
|-------------|------------|------------|------------|
| 鬱陶しい・面倒     | 10 (41.7%) | 11 (33.3%) | 21 (36.8%) |
| 不快          | 4 (16.7%)  | 5 (15.2%)  | 9 (15.8%)  |
| 気持ち悪い       | 1 (4.2%)   | 5 (15.2%)  | 6 (10.5%)  |
| 怖い          | 1 (4.2%)   | 4 (12.1%)  | 5 (8.8%)   |
| 辛い          | 1 (4.2%)   | 2 (6.1%)   | 3 (5.3%)   |
| 相手が嫌いに      | 0 (0.0%)   | 3 (9.1%)   | 3 (5.3%)   |
| 相手から信用されてない | 1 (4.2%)   | 1 (3.0%)   | 2 (3.5%)   |
| 複雑          | 1 (4.2%)   | 1 (3.0%)   | 2 (3.5%)   |
| 何も感じない      | 2 (8.3%)   | 0 (0.0%)   | 2 (3.5%)   |
| 申し訳ない       | 1 (4.2%)   | 1 (3.0%)   | 2 (3.5%)   |
| その他         | 2 (8.3%)   | 0 (0.0%)   | 2 (3.5%)   |
| 合計          | 24         | 33         | 57         |

**行動への影響** 『執拗なメッセージ送信』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した54名中44名が「この行為によってあなたの行動にどのような変化・影響がありましたか」という設問に回答しており、全記述数は44であった。KJ法の結果、「その他」を含めて8カテゴリーが抽出された (Table 6-3)。「影響なし」、会わないようにするなどの「関係回避」、気持ちが冷めたり関わるのが面倒になったなどの「疎遠」、メールを見ないようにするなどの「無視」、逐一メールをチェックして返信するようにするなどの「相手に合わせる」、友人と外出したり遊んだりする

Table6-3 『執拗なメッセージ送信』における「行動への影響」の 카테고리記述数

| カテゴリー名     | 男性        | 女性        | 合計         |
|------------|-----------|-----------|------------|
| 影響なし       | 7 (36.8%) | 3 (12.0%) | 10 (22.7%) |
| 関係回避       | 0 (0.0%)  | 6 (24.0%) | 6 (13.6%)  |
| 疎遠         | 5 (26.3%) | 7 (28.0%) | 12 (27.3%) |
| 無視         | 2 (10.5%) | 4 (16.0%) | 6 (13.6%)  |
| 相手に合わせる    | 2 (10.5%) | 2 (8.0%)  | 4 (9.1%)   |
| 第三者との関わり減少 | 1 (5.3%)  | 1 (4.0%)  | 2 (4.5%)   |
| 警戒         | 1 (5.3%)  | 0 (0.0%)  | 1 (2.3%)   |
| その他        | 1 (5.3%)  | 2 (8.0%)  | 3 (6.8%)   |
| 合計         | 19        | 25        | 44         |

ことを控える「第三者との関わり減少」、自身や周囲の人の身の危険を感じて気を配る「警戒」であった。

**対処** 『執拗なメッセージ送信』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した54名中44名が「この行為に対して、あなたはどのような対応・対処を行いましたか」という設問に回答しており、全記述数は51であった。KJ法の結果、「その他」を含めて6カテゴリーが抽出された (Table 6-4)。「無視」、やめるよう説得したり抗議をするといった「意思の主張」、こまめに連絡したり返信したりする「相手に従う」、メールの受信を拒否するなどの「拒否する」、「別れる」であった。

Table6-4 『執拗なメッセージ送信』における「対処」の 카테고리記述数

| カテゴリー名 | 男性        | 女性         | 合計         |
|--------|-----------|------------|------------|
| 無視     | 9 (45.0%) | 11 (35.5%) | 20 (39.2%) |
| 意思の主張  | 5 (25.0%) | 5 (16.1%)  | 10 (19.6%) |
| 相手に従う  | 2 (10.0%) | 2 (6.5%)   | 4 (7.8%)   |
| 拒否する   | 1 (5.0%)  | 6 (19.4%)  | 7 (13.7%)  |
| 別れる    | 1 (5.0%)  | 4 (12.9%)  | 5 (9.8%)   |
| その他    | 2 (10.0%) | 3 (9.7%)   | 5 (9.8%)   |
| 合計     | 20        | 31         | 51         |

## 脅迫・侮辱

どのような媒体を用いてこのような行為をされたか、どのような内容のメッセージであったかに加え、この行為によって引き起こされた気持ち、行動への影響、対処について、それぞれカテゴリー化を行った。

**媒体** 『脅迫・侮辱』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した26名中19名

が「どのような媒体を用いられましたか」という設問に回答しており、全記述数は21であった。KJ法の結果、「その他」を含めて5カテゴリーが抽出された (Table 7-1)。「携帯メール」、「mixiのメッセージ」、「掲示板」、「Twitter」等であった。

Table7-1 『脅迫・侮辱』における「媒体」の 카테고리記述数

| カテゴリー名     | 男性        | 女性        | 合計        |
|------------|-----------|-----------|-----------|
| 携帯のメール     | 3 (27.3%) | 6 (60.0%) | 9 (42.9%) |
| mixiのメッセージ | 2 (18.2%) | 3 (30.0%) | 5 (23.8%) |
| 掲示板        | 4 (36.4%) | 0 (0.0%)  | 4 (19.1%) |
| Twitter    | 2 (18.2%) | 0 (0.0%)  | 2 (9.5%)  |
| その他        | 0 (0.0%)  | 1 (10.0%) | 1 (4.8%)  |
| 合計         | 11        | 10        | 21        |

**内容** 『脅迫・侮辱』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した26名中17名が「どのような内容のメッセージでしたか」という設問に回答しており、全記述数は21であった。KJ法の結果、「その他」を含めて4カテゴリーが抽出された (Table 7-2)。実際相手を傷つけたり見下したりするような内容の「誹謗中傷」、実際相手が身の危険を感じるような内容の「脅迫」、実際相手の過去やメールの内容などを書き込むなどの「プライベートの暴露」であった。

Table7-2 『脅迫・侮辱』における「内容」の 카테고리記述数

| カテゴリー名    | 男性        | 女性        | 合計         |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 誹謗中傷      | 6 (60.0%) | 4 (36.4%) | 10 (47.6%) |
| 脅迫        | 1 (10.0%) | 3 (27.3%) | 4 (19.1%)  |
| プライベートの暴露 | 1 (10.0%) | 1 (9.1%)  | 2 (9.5%)   |
| その他       | 2 (20.0%) | 3 (27.3%) | 5 (23.8%)  |
| 合計        | 10        | 11        | 21         |

**気持ち** 『脅迫・侮辱』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した26名中19名が、「この行為によってあなたはどのような気持ちになりましたか」という設問に回答しており、

Table7-3 『脅迫・侮辱』における「気持ち」の 카테고리記述数

| カテゴリー名 | 男性        | 女性        | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 嫌・不快   | 6 (46.2%) | 2 (15.4%) | 8 (30.8%) |
| 怖い     | 1 (7.7%)  | 4 (30.8%) | 5 (19.2%) |
| 悲しい    | 2 (15.4%) | 2 (15.4%) | 4 (15.4%) |
| 気持ち悪い  | 0 (0.0%)  | 2 (15.4%) | 2 (7.7%)  |
| 落ち込む   | 1 (7.7%)  | 1 (7.7%)  | 2 (7.7%)  |
| その他    | 3 (23.1%) | 2 (15.4%) | 5 (19.2%) |
| 合計     | 13        | 13        | 26        |

全記述数は26であった。KJ法の結果、「その他」を含めて6カテゴリーが抽出された (Table 7-3)。「嫌・不快」、「怖い」、「悲しい」、「気持ち悪い」、「落ち込む」であった。

**行動への影響** 『脅迫・侮辱』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した26名中18名が、「この行為によってあなたの行動にどのような変化・影響がありましたか」という設問に回答しており、全記述数は18であった。KJ法の結果、6カテゴリーが抽出された (Table 7-4)。人とのかかわりを制限するなどの「行動制限」、「無視する」、書き込みを見るのが怖くなるなどの「怖い」、「気持ちが冷める」、寝込むなどの「精神的苦痛」、変化や影響「なし」であった。

Table7-4 『脅迫・侮辱』における「行動への影響」のカテゴリー記述数

| カテゴリー名  | 男性        | 女性        | 合計        |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 行動制限    | 6 (60.0%) | 3 (37.5%) | 9 (50.0%) |
| 無視する    | 1 (10.0%) | 1 (12.5%) | 2 (11.1%) |
| 怖い      | 0 (0.0%)  | 2 (25.0%) | 2 (11.1%) |
| 気持ちが冷める | 2 (20.0%) | 0 (0.0%)  | 2 (11.1%) |
| 精神的苦痛   | 0 (0.0%)  | 2 (25.0%) | 2 (11.1%) |
| なし      | 1 (10.0%) | 0 (0.0%)  | 1 (5.6%)  |
| 合計      | 10        | 8         | 18        |

**対処** 『脅迫・侮辱』に対して、恋人または元恋人からされた事があると回答した26名中19名が、「この行為に対して、あなたはどのような対応・対処を行いましたか」という設問に回答しており、全記述数は18であった。KJ法の結果、「そ

他」を含めて5カテゴリーが抽出された (Table 7-5)。メール・書き込みを見ないようにするなどの「回避」、別れたり、関わりを減らすなどの「距離をとる」、反論するなどの「意思の主張」、「対処しない」であった。

Table7-5 『脅迫・侮辱』における「対処」のカテゴリー記述数

| カテゴリー名 | 男性        | 女性        | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 回避     | 3 (30.0%) | 3 (37.5%) | 6 (33.3%) |
| 距離をとる  | 3 (30.0%) | 1 (12.5%) | 4 (22.2%) |
| 意思の主張  | 1 (10.0%) | 1 (12.5%) | 2 (11.1%) |
| 対処しない  | 1 (10.0%) | 1 (12.5%) | 2 (11.1%) |
| その他    | 2 (20.0%) | 2 (25.0%) | 4 (22.2%) |
| 合計     | 10        | 8         | 18        |

### なりすまし、私的情報等による攻撃、私的情報の掲載

これら3つの行為についても、具体的な行為の内容等、この行為によって自身の行動にどのような影響があったか、どのような対処を行ったかについて尋ねたが、すべてにおいて回答数が2～6と少なかったため分析を行わなかった。

### 6種の行為以外の行為

「これまで回答された以外に、携帯やパソコン等のメール機能やソーシャルネットワークサービス等を用いて、恋人や元恋人からされてあなたが嫌だった、怖かった、傷ついた行為はありますか」に対して、53名が回答しており、全記述数は55であった。KJ法の結果、「その他」を含めて15カテゴリーが抽出された (Table 8)。「誹謗中傷」、

Table8 6種の行為以外のカテゴリー記述数

| カテゴリー名           | 男性        | 女性        | 合計        |
|------------------|-----------|-----------|-----------|
| 誹謗中傷             | 2 (15.4%) | 6 (14.3%) | 8 (14.5%) |
| 私生活の暴露           | 3 (23.1%) | 3 (7.1%)  | 6 (10.9%) |
| ICT利用法についての意見の相違 | 2 (15.4%) | 4 (9.5%)  | 6 (10.9%) |
| ネット上の情報から真実を知る   | 0 (0.0%)  | 4 (9.5%)  | 4 (7.3%)  |
| ネット上での交友関係の監視    | 2 (15.4%) | 2 (4.8%)  | 4 (7.3%)  |
| 写真の悪用            | 0 (0.0%)  | 4 (9.5%)  | 4 (7.3%)  |
| 自傷・他害による脅迫       | 0 (0.0%)  | 3 (7.1%)  | 3 (5.5%)  |
| ネット上での付きまとい行為    | 0 (0.0%)  | 3 (7.1%)  | 3 (5.5%)  |
| 行動監視             | 0 (0.0%)  | 3 (7.1%)  | 3 (5.5%)  |
| 自分を優先するよう要求      | 0 (0.0%)  | 2 (4.8%)  | 2 (3.6%)  |
| メールを無理やり見る       | 0 (0.0%)  | 2 (4.8%)  | 2 (3.6%)  |
| 情報を検索            | 1 (7.7%)  | 0 (0.0%)  | 1 (1.8%)  |
| 執拗にメールを送りつける     | 0 (0.0%)  | 1 (2.4%)  | 1 (1.8%)  |
| なりすまし            | 1 (7.7%)  | 0 (0.0%)  | 1 (1.8%)  |
| その他              | 2 (8.3%)  | 5 (11.9%) | 7 (12.7%) |
| 合計               | 13        | 42        | 55        |

「私生活の暴露」, 「ICT利用法についての意見の相違」, 「ネット上の情報から真実を知る」, 「ネット上での交友関係の監視」, 「写真の悪用」, 「自傷・他害による脅迫」, 「ネット上での付きまとい行為」, 「行動監視」, 「自分を優先するよう要求」, 「メールを無理やり見る」, 「情報を検索」, 「執拗にメールを送りつける」, 「なりすまし」であった。

### 考察

本研究では、先行研究で指摘されているICTを用いたIPVの主な6種について、日本におけるその実態を検討した。

調査対象者のICT利用状況から、ほとんどの人が携帯・スマートフォンの通話やメールの送受信を利用していることが明らかとなった。また、SNSの利用についても、4割程度の人がいずれかのSNSを利用しており、総務省(2011)の結果とも一致する。これらの事から、本調査対象者においても多くの人がICTを利用していることがわかる。

各行為の経験の有無を見てみると、交際相手、元交際相手からのどちらにおいても『言動監視』が最も多かったため、『言動監視』は他に比べて、より行われやすい行為であると言える。一方、『執拗なメッセージ送信』や『脅迫・侮辱』については、現在の交際相手よりも元交際相手から行われることが多いことが明らかとなった。上記の3行為はサイバーストーキングとも重なる行為であり(Finn, 2004), 本研究での結果は、ストーキングの加害者は元交際相手であることも多いとする先行研究(Bjerregaard, 2000; Tjaden & Thoennes, 2000; Tjaden & Thoennes, 1998)とも一致する。しかし、行為自体は重なる部分が多いが、一方は現在も親密な関係を継続しており、もう一方は既に親密な交際関係が解消されているなど、加害者と被害者の関係性が異なる。そのため、異なる側面も存在する可能性もあり、この点についてはさらなる検討が必要であろう。

以下では、各行為の詳細について述べていくこととする。

### 言動監視

交際相手の言動をチェックするために、SNSのログイン時間やSNSにおける書き込みを利用していることが多いことが明らかとなった。SNS利用者は自身の行動についても記述している場合も多いと考えられる。そのため、SNSによって、実際に相手に聞くことなく、いつでもどこにいても容易に相手の言動をチェックすることが可能となっていることが明らかとなった。

このような行為をされることによって生じる気持ちの面での影響としては、「嫌・不快」「気持ち悪い」などの否定的な気持ちになることが多い一方で、「なんとも思わない」という回答も一定数見られた。さらに、わずかではあるが「どちらかという嬉しい」という、交際相手の行為に対して好意的に受け止めている人も存在することが明らかとなった。交際相手が自分の言動をチェックする行為を、相手の愛情の表れと認識することによって、嬉しいという気持ちが生じていることが推測された。一方で、自分のことを信用してもらえていないためと認識した場合には、これらの行為に対して否定的な気持ちが生じるであろう。このように、受け手が交際相手の行為をどのように認識するかによって生じる気持ちが異なると思われる。行動面での影響としては「ICT利用の制限」や「ICT利用を隠す」といった、受け手の行動が制限されてしまうという影響が最も多かった。しかし、気持ちの場合と同様、受け手の行動にも「影響なし」と答える人が一定数おり、人によってその行動への影響の仕方も大きく異なることが明らかとなった。交際相手のSNSを見ること自体は自然な行為と言えないわけではないので、どこからを“監視”とするのかは難しい問題であり、個人の認識の仕方に大きく依存すると考えられる。そのため、人によってはその行為によってあまり影響は受けておらず、問題とならない場合も多いと考えられる。

言動監視への対処としては、行動への影響と同様のカテゴリーが見られ、ICTの利用を制限したり隠したりすることで、交際相手からの更なる言

動監視を回避するための対処を行っていることが明らかとなった。また、対処しない、無視などの回答もあり、気持ち、行動において影響がないと認識している人が対処を行わなかったものと推測された。

### 執拗なメッセージ送信

執拗にメッセージを送信されたと感じる頻度は、数分毎から月に1、2回までと個人によって大きく異なることが明らかとなった。つまり、同じ頻度であっても人によっては執拗に送られたと感じ不快に思う人もいれば、普通程度の頻度と感じ、気にとめない人もおり、その行為を執拗だととらえるかどうかは個人の認識の仕方に大きく依存しているといえる。また、その内容によっても受け手が“執拗である”と認識しやすさ（しにくさ）が異なる可能性も考えられる。メッセージの内容としては、「居場所・行動を問う」や「連絡の要求」など交際相手の行動をチェックするために行われることが多いことが明らかとなった。「復縁を求める」「会う・話す事の希求」といった行為は、いわゆる付きまとい行為にあたり、元交際相手からされる場合も多いと推測される。しかし、本調査では現在の交際相手からされた行為か元交際相手からされた行為について言及しているのかは不明である。今後は、それらを区別して調査する必要があるだろう。

気持ちへの影響としては、「何も感じない」という回答はわずかであり、ほとんどの人がネガティブな気持ちを感じることが明らかとなった。一方で、行動への影響では「影響なし」という回答が多かったことから、執拗なメッセージ送信という行為は受け手の気持ちの面により多くの影響を与える行為と言える。しかし、「影響なし」という回答も多い一方で、「関係回避」「疎遠」「無視」など交際相手から距離を取る行動も多くみられた。行為者からすると、言動を監視したり、関わりを求めたいという思いからの行為であるが、結果的には行為者の意図と反する受け手の行為を引き起こすことにつながるといえる。また、割合

としては少ないが「相手に合わせる」や「第三者との関わり減少」といった回答も存在した。これらは、相手の要求に従う行為であり、受け手の自由な意思決定が尊重されない関係性につながりうると考えられる。

執拗なメッセージ送信への対処としては、暗に拒否している態度を示す「無視」や「拒否する」も含めて、「意思の主張」といった相手に自分の意思を伝えるという対処を行っている場合が多いことが明らかとなった。一方で、割合は少ないが「相手に従う」という対処も見られ、人によって対処の方向性が異なることが明らかとなった。

### 脅迫侮辱

利用媒体としては携帯メールが最も多く用いられていた。4～6割程度の人がSNSをほとんど利用していない一方で、携帯メールは9割以上の人利用していることから、携帯メールが比較的誰にでも使いやすいため、『脅迫・侮辱』を行う媒体としても多く用いられていると考えられた。その内容としては、「誹謗中傷」「脅迫」に加え、「プライベートの暴露」という回答もあり、交際相手のプライベートをネット上に暴露すると脅したり、実際に暴露することで相手を侮辱するという行為も行われていた。

他の行為では見られた気持ちの面で影響がないという回答は見られなかった。つまり、ほとんどの場合、『脅迫・侮辱』という行為は受け手の気持ちをネガティブにする行為であるといえる。また、全記述数が少ないが、最も多かったのが「行動が制限された」という影響であった。『脅迫・侮辱』という行為は受け手の気持ちを否定的なものにすることに加えて、受け手の行動を制限してしまうという機能を併せ持つことがわかる。

対処としては、『執拗なメッセージ送信』では自身の意思を積極的にまたは消極的にでも示すような対処が多かったが、『脅迫・侮辱』の場合は意思の主張は比較的少なく、「回避」「距離を取る」などの交際相手とのかわりを減らすことによって対処することが多いことが明らかとなった。『執拗なメッセージ送信』の場合も、関わりを減らす

ことによって対処する場合が見られたが、その理由としては「鬱陶しい・面倒」という気持ちから来ているものが多いと考えられた。しかし、『脅迫・侮辱』の場合は気持ちへの影響として「怖い」という回答も多く、怖さから関わりを減らすという対処が行われているのではないかと推測された。

### なりすまし・私的情報等による攻撃・私的情報の掲載

『なりすまし』『私的情報等による攻撃』『私的情報の掲載』については、経験頻度が非常に少ないことが明らかとなった。私的情報の掲載については、それによって交際相手を脅迫したり、侮辱することにつながる可能性もあり、上述の『脅迫侮辱』にも含まれる行為とも考えられる。相手が嫌がるような情報や写真がいったんインターネット上に掲載されてしまうと、それらを完全に削除することは現実的に不可能であり、被害者に与える影響は非常に大きいと考えられる。実際、日本においても元交際相手によるわいせつ画像の掲載などが社会問題化し、実際にそのような画像をインターネット上に流出させたり、流出させるなどと元交際相手を脅したり、復縁を迫るといった事案が発生していることが報告されている(警察庁, 2014)。生起頻度は低い全く起こっていないわけではないこれらの行為についても、他の行為と同様に詳細な検討を行っていくことが必要であると考えられる。

### 6種のIPV行為以外の行為

先行研究で指摘されている6種の行為以外にも日本に独自の行為が存在することも考えられたため、交際相手からされて嫌だった、怖かった、傷ついた行為について自由記述によって回答を求めた。KJ法の結果を見てみると、「誹謗中傷」「自傷・他害による脅迫」「自分を優先するよう要求」は『脅迫・侮辱』に、「私生活の暴露」は『私的情報の掲載』に、「ネット上での交友関係の監視」「行動監視」「メールを無理やり見る」は『言動監視』に、「写真の悪用」「情報を検索」はその情報を用いて嫌なことをされた場合に、『私的情報等による攻

撃』に含まれると考えられる。加えて、「執拗にメールを送りつける」は『執拗なメッセージ送信』、「なりすまし」は『なりすまし』とほぼ同じ内容であった。「ICT利用法についての意見の相違」は交際相手からされた行為というよりは、考え方が異なっているという内容であり、「ネット上の情報から真実を知る」についても交際相手からされたというよりも自分が交際相手の情報を知ってしまうといった内容であった。以上より、ほとんどの行為は6種の行為のいずれかに含まれると考えられた。したがって、日本におけるICTを用いたIPVとしては先行研究で挙げられている6種の行為が主であり、本調査ではそれら以外に新たに抽出された行為としては、「ネット上での付きまとい行為」のみであった。この行為もサイバーストーキング研究ではすでに指摘されており、「付きまとい行為」の目的が交際相手のネット上での言動を監視することが目的である場合は、『言動監視』に含まれるとも考えられる。このように、行動は同じであってもその意図が異なる場合も多く存在すると考えられる。

### 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、日本におけるICTを用いたIPV行為の経験頻度に加え、具体的にどのようにそれらが行われているのか、受け手への影響やその対処について明らかにすることができた。しかし、本調査では、経験頻度以外は、現在の交際相手からされた行為なのか元交際相手からされた行為なのかを区別していない。現在の交際相手と元交際相手とは、関係性が異なる。そのため、その行為の目的が異なる可能性も考えられる。したがって、今後は両者を区別して現在の交際相手からの行為と元交際相手からの行為をそれぞれ検討し、その共通する部分や相違点を明らかにすることが必要であろう。それによってIPVだけでなくストーキングについてもその予防と介入に寄与しうる知見が得られると考えられる。また、人によって行為の影響が大きく異なることが明らかとなり、その行為に対する認識の違いがあることが



推測された。しかし、どのような違いから影響力や認識の違いが生じるのかは定かではない。したがって、関係性の質や行為者・受け手の性格的な要因など影響力や認識の違いを規定する要因についても今後検討することが必要であろう。

今日、ICTの進歩は目覚ましく、若者の使用する媒体も短いスパンで切り替わっていく。それに伴って、さらに新たな形態の攻撃行動が生み出されていく可能性がある。したがって、本研究で挙げられた行為も短いスパンで、頻度が変化したり、新たなタイプの行為が主流となっていく可能性がある。効果的な予防啓発・介入のためには、新たな技術によってどのような攻撃行為が生じるのかについて継続的に注意を払い、その特徴や影響力を理解していくことが必要であろう。

#### 引用文献

- Bennett, D. C., Guran, E. L., Ramos, M. C., & Margolin, G. 2011 College Students' Electronic Victimization in Friendships and Dating Relationships: Anticipated Distress and Associations With Risky Behaviors *Violence and Victims*, **26**, 410-429.
- Bjerregaard, B. 2000 An empirical study of stalking. Victimization. *Violence and Victims*, **15**, 389-406.
- Burke, S. C., Wallen, M., Vail-Smith, K., & Knox, D. 2011 Using technology to control intimate partners: An exploratory study of college undergraduates, *Computers in Human Behavior*, **27**, 1162-1167.
- Finn, J. 2004 A survey of online harassment at a university campus. *Journal of Interpersonal Violence*, **19**, 468-483.
- Helsper, E. J., & Whitty, M. T. 2010 Netiquette within married couples: Agreement about acceptable online behavior and surveillance between partners *Computer in Human Behavior*, **26**, 916-926.
- 警察庁 2014 平成26年上半期のサイバー空間をめぐる脅威の情勢について < [http://www.npa.go.jp/kanbou/cybersecurity/H26\\_kami\\_jousei.pdf](http://www.npa.go.jp/kanbou/cybersecurity/H26_kami_jousei.pdf) > (2014年10月16日)
- Korchmaros, J. D., Ybarra, M. L., Langhinrichsen-Rohling, J., Boyd, D., & Lenhart, A. 2013 Perpetration of teen dating violence in a networked society. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **16**, 561-567.
- Melander, L. A. 2010 College Students' Perceptions of Intimate Partner Cyber Harassment *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **13**, 263-268.
- Saltzman, L. E. (2004). Definitional and methodological issues related to transnational research on intimate partner violence. *Violence against women*, **10**, 812-830.
- Shorey, R. C., Cornelius, T. L., & Bell, K. M. 2008 A critical review of theoretical frameworks for dating violence: Comparing the dating and marital fields. *Aggression and Violence Behavior*, **13**, 185-194.
- 総務省 2011 ソーシャルメディアの可能性と課題 平成23年版情報通信白書 155-181. < <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/pdf/n3020000.pdf> > (2013年11月20日)
- 総務省 2013 インターネットの利用動向 平成25年版情報通信白書 331-346. < <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/pdf/n4300000.pdf> > (2013年11月20日)
- Tjaden, P., & Thoennes, N. 1998 Stalking in america: Findings from the national violence against women survey. Washington, DC: National Institute of Justice and the Center for Disease Control and Prevention.
- Tjaden, P., & Thoennes, N. 2000 Full report of the prevalence, incidence, and consequences of violence against women: Findings from the national violence against women survey. Washington, DC: National Institute of

Justice and the Center for Disease Control  
and Prevention

Zweig, J. M., Dank, M., Yahner, J., & Lachman,  
P. 2013 The Rate of Cyber Dating Abuse  
Among Teens and How It Relates to Other  
Forms of Teen Dating Violence. *Journal of  
Youth and Adolescence*, 42, 1063-1077.

#### 付記

本研究は日本学術振興会科研費（課題番号  
24730572）の助成を受けた。

## 平成 27 年度 (H27.1.1-H27.12.31) 研究業績

### 五福キャンパス

|              |       |                  |
|--------------|-------|------------------|
| センター長・教授     | 松井 祥子 | Shoko Matsui     |
| 准 教 授        | 西村優紀美 | Yukimi Nishimura |
| 講 師          | 竹澤みどり | Midori Takezawa  |
| 看 護 師        | 角間 純子 | Junko Kakuma     |
| 看 護 師        | 山田 真帆 | Maho Yamada      |
| 看 護 師        | 板倉 俊子 | Toshiko Itakura  |
| カウンセラー (非常勤) | 細川 祝  | Iwai Hosokawa    |

### 松 井 祥 子

#### 【著書】

- 1) 山本 洋, 久保恵嗣, 全 陽, 川上 聡, 藤永康成, 松井祥子. 最新IgG4関連疾患. 岡崎和一, 川 茂幸編集主幹. 東京: 診断と治療社; 2015. 呼吸器病変; p73-80.
- 2) 松井祥子. 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ 免疫症候群 (第2版) その他の免疫疾患を含めてI. 日本臨床社編集. 大阪: 日本臨床社; 2015. IgG4関連呼吸器疾患; p119-125.

#### 【原著】

- 1) Hayashikawa Y, Iwata M, Inomata M, Kawagishi Y, Tokui K, Taka C, Kambara K, Okazawa S, Yamada T, Hayashi R, Kamura Y, Okazawa T, Matsui S, Kigawa M, and Tobe K. Association of serum adiponectin with asthma and pulmonary function in the Japanese population. *Endocrine Journal*. 2015; 62: 695-709.
- 2) Suzuki K, Furuse H, Tsuda T, Masaki Y, Okazawa S, Kambara K, Inomata M, Miwa T, Matsui S, Kashii T, Taniguchi H, Hayashi R, and Tobe K. Utility of

creatinine/cystatin C ratio as a predictive marker for adverse effects of chemotherapy in lung cancer: A retrospective study. *J International Med Res*. 2015; 0: 1-10.

- 3) Suzuki K, Ichikawa T, Furuse H, Tsuda T, Tokui K, Masaki Y, Okazawa S, Kambara K, Inomata M, Yamada T, Miwa T, Matsui S, Kashii T, Taniguchi H, Hayashi R, Tobe K: Relationship of the urine cortisol level with the performance status of patients with lung cancer: a retrospective study. *Support Care Cancer* 2015; 23:2129-2133.
- 4) Inomata M, Hayashi R, Yamamoto A, Tokui K, Taka C, Okazawa S, Kambara K, Suzuki K, Ichikawa T, Yamada T, Miwa T, Kashii T, Matsui S, Tobe K and Imura J. Plasma neuron-specific enolase level as a prognostic marker in patients with non-small cell lung cancer receiving gefitinib. *Mol Clin Oncol*. 2015; 3: 802-806.
- 5) Nakajima A, Masaki Y, Nakamura T, Kawanami T, Ishigaki Y, Takegami T, Kawano M, Yamada K, Tsukamoto N, Matsui S, Saeki T, Okazaki K, Kamisawa

- T, Miyashita T, Yakushijin Y, Fujikawa K, Yamamoto M, Hamano H, Origuchi T, Hirata S, Tsuboi H, Sumida T, Morimoto H, Sato T, Iwao H, Miki M, Sakai T, Fujita Y, Tanaka M, Fukushima T, Okazaki T, Umehara H. Decreased Expression of Innate Immunity-Related Genes in Peripheral Blood Mononuclear Cells from Patients with IgG4-Related Disease. *Pros One*. 2015; 10:e0126582
- 6) Khosroshahi A, Wallace ZS, Crowe JL, Akamizu T, Azumi A, Carruthers MN, Chari ST, Della-Torre E, Frulloni L, Goto H, Hart PA, Kamisawa T, Kawa S, Kawano M, Kim MH, Kodama Y, Kubota K, Lerch MM, Löhr M, Masaki Y, Matsui S, Mimori T, Nakamura S, Nakazawa T, Ohara H, Okazaki K, Ryu JH, Saeki T, Schleinitz N, Shimatsu A, Shimosegawa T, Takahashi H, Takahira M, Tanaka A, Topazian M, Umehara H, Webster GJ, Witzig TE, Yamamoto M, Zhang W, Chiba T, Stone JH: Second International Symposium on IgG4-Related Disease. International Consensus Guidance Statement on the Management and Treatment of IgG4-Related Disease. *Arthritis Rheumatol*. 2015;67:1688-99.
- 7) Matsui S, Yamamoto H, Minamoto S, Waseda Y, Mishima M, Kubo K. Proposed diagnostic criteria for IgG4-related respiratory disease DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.resinv.2015.09.002>  
Publication stage: In Press Corrected Proof  
Published online: October 19 2015
- 8) Kawano H, Ishii A, Kimura T, Takahashi T, Hironaka H, Kawano M, Yamaguchi M, Oishi K, Kubo M, Matsui S, Notohara K, Ikeda E. IgG4-related disease manifesting the gastric wall thickening. *Pathol Int*. 2015 Nov 24. doi: 10.1111/pin.12364. [Epub ahead of print]
- 9) 松井祥子, 山本 洋, 源 誠二郎, 早稲田優子, 三嶋理晃, 久保恵嗣. 第54回日本呼吸器学会学術講演会シンポジウム報告 IgG4関連呼吸器疾患の診断基準. *日呼吸誌* 2015; 4: 129-132.
- 10) 松井祥子. IgG4関連疾患. *日サ会誌*. 2015; 35: 47-49.
- 11) 久保恵嗣, 松井祥子, 山本 洋. IgG4関連呼吸器疾患. *日内会誌*. 2015; 104: 1848-1852.

### 【総説】

- 1) 松井祥子. IgG4関連呼吸器疾患. *Modern Physician*. 2015; 35 (11): 1339-42.

### 【学会発表】

- 1) Matsui S, Yamamoto H, Handa T, Minamoto S, Waseda Y, Mishima M, Kubo K. Proposal for diagnostic criteria for IgG4-related respiratory disease. *ATS 2015 International Conference*; 2015 May 16-20; Denver.
- 2) Okazawa S, Tanaka H, Shimokawa K, Tokui K, Kambara K, Inomata M, Yamada T, Miwa T, Hayashi R, Ashizawa N, Yamamoto Y, Doki Y, Matsui S, Tobe K. Successful surgical drainage in a case of invasive pulmonary aspergillosis combined with MRSA infection. *American Thoracic Society*; 2015 May 15-20; Denver.
- 3) 岡澤成祐, 徳井宏太郎, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子, 吉田良昌, 三輪重治. 左乳糜胸の治療に難渋した後腹膜嚢胞性病変を伴うリンパ脈管筋腫症の1例. 第225回日本内科学会北陸地方会; 2015 Mar8; 石川.
- 4) 久保恵嗣, 松井祥子. シンポジウム「IgG4関連疾患における最近の進歩～IgG4関連呼吸器疾患」. 第112回日本内科学会講演会; 2015 Apr 10-12; 京都.

- 5) 早稲田優子, 松井祥子, 佐伯啓吾, 渡辺知志, 松沼 亮, 高戸葉月, 市川由加里, 安井正英, 山田和徳, 川野充弘, 笠原寿郎. IgG4 関連肺疾患モデルマウスの確立 - Lat Y136F knock-in マウスの肺病変の解析 -. 第55回日本呼吸器学会学術講演会; 2015 Apr 17-19; 東京.
- 6) 徳永麻美, 林龍二, 平澤慧里子, 下川一生, 徳井宏太郎, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 松井祥子, 戸邊一之. ACOSの臨床的意義当科における COPD 単独と ACOS との比較. 第55回日本呼吸器学会学術講演会; 2015 Apr 17-19; 東京.
- 7) 猪又峰彦, 徳井宏太郎, 下川一生, 岡澤成祐, 神原健太, 山田徹, 三輪敏郎, 松井祥子, 林龍二, 戸邊一之, 菓子井達彦. 肺癌症例における Palliative prognostic index の有用性に関する検討. 第55回日本呼吸器学会学術講演会; 2015 Apr 17-19; 東京.
- 8) 徳井宏太郎, 田中宏明, 下川一生, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 松井祥子, 林龍二, 戸邊一之. 当院における肺非結核性抗酸菌症の治療に関する検討. 第90回日本結核病学会総会. 2015 Mar 27-28; 長崎.
- 9) 平澤慧里子, 林龍二, 下川一生, 徳井宏太郎, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 松井祥子, 戸邊一之, 徳永真美. 当科間質性肺炎診療における HRCT の役割. 第55回日本呼吸器学会学術講演会; 2015 Apr 17-19; 東京.
- 10) 篠田晃一郎, 多喜博文, 林龍二, 松井祥子, 朴木博幸, 津田玲奈, 小尾麻衣子, 山口智史, 松井篤, 戸邊一之. 抗ARS抗体陽性症例における, 抗体検出法による結果の相違についての検討. 第59回日本リウマチ学会総会・学術集会; 2015 Apr 23-25; 名古屋.
- 11) 猪又峰彦, 田中宏明, 三輪敏郎, 下川一生, 徳井宏太郎, 岡澤成祐, 神原健太, 山田徹, 林龍二, 戸邊一之, 菓子井達彦, 松井祥子. クリゾチニブにより頭蓋外病変に対する抗腫瘍効果が得られたアレクチニブ耐性 ALK 遺伝子転座陽性肺癌の1例. 第74回呼吸器合同北陸地方会; 2015 May 30-31; 新潟.
- 12) 岡澤成祐, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 高千紘, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子, 芦澤信之, 山本善裕. 「富山呼吸器講習会2014」繰り返し参加した受講生への対応. 第74回呼吸器合同北陸地方会; 2015 May 30-31; 新潟.
- 13) 徳井宏太郎, 田中宏明, 下川一生, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子. 器質性肺炎として治療中に肺アスペルギルス症が明らかとなった1例. 第74回呼吸器合同北陸地方会; 2015 May 30-31; 新潟.
- 14) 松本かおる, 岡澤成祐, 下川一生, 田中宏明, 徳井宏太郎, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子, 河合暦美, 芦澤信之, 鳴河宗聡, 山本善裕. 嫌気性菌性膿胸に対して静注 Metronidazole 併用が有効と考えられた一例. 第74回呼吸器合同北陸地方会; 2015 May 30-31; 新潟.
- 15) 神原健太, 中嶋悠, 芦澤信之, 下川一生, 徳井宏太郎, 高千紘, 岡澤成祐, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 松井祥子, 菓子井達彦. 新旧ナビゲーションの機能比較について (BF-NAVI と Direct Path). 第38回日本呼吸器内視鏡学会学術集会; 2015 Jun 11-12; 東京.
- 16) 岡澤成祐, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 松井祥子, 芦澤信之, 山本善裕, 戸邊一之. EBUS-GS で診断可能であった肺真菌症症例の検討. 第38回日本呼吸器内視鏡学会学術集会; 2015 Jun 11-12; 東京.
- 17) 徳井宏太郎, 田中宏明, 下川一生, 高千紘, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子. クリゾチニブによる薬剤性肺障害の治療後にア

- レクチニブを投与した肺腺癌の一例. 第70回日本肺癌学会北陸支部学術集会; 2015 Jul 11; 富山.
- 18) 安川瞳, 神原健太, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 高千紘, 岡澤成祐, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子. ゲフィチニブ・アファチニブを投与後エルロチニブが著効した一例. 第70回日本肺癌学会北陸支部学術集会; 2015 Jul 11; 富山.
- 19) 篠田晃一郎, 朴木博幸, 津田玲奈, 小尾麻衣子, 山口智史, 松井篤, 木戸敏喜, 松井祥子, 多喜博文, 戸邊一之. 関節リウマチへのMTX, グリムマブ療法中に抗PL-7抗体陽性の間質性肺炎を併発した一例. 第27回日本リウマチ学会中部支部学術集会; 2015 Sep 4-5; 愛知.
- 20) 松井祥子, 林 龍二, 濱島 丈, 下川一生, 猪又峰彦, 徳井宏太郎, 岡澤成祐, 神原健太, 山田徹, 三輪敏郎, 戸邊一之, 土岐善紀. IgG4関連疾患における抗酸菌感染の検討. 第24回日本シェーグレン症候群学会学術集会; 2014 Sep 18-19; 東京.
- 21) 正木康史, 松井祥子, 川野充弘, 佐伯敬子, 坪井洋人, 平田信太郎, 宮下賜一郎, 折口智樹, 藤川敬太, IgG4関連疾患研究グループ. IgG4関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究. 第24回日本シェーグレン症候群学会学術集会; 2014 Sep 18-19; 東京.
- 22) 岡澤成祐, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子, 東祥嗣, 山本善裕. 繰り返す外泊後の発熱を契機に診断された加湿器肺の1例. 第75回呼吸器合同北陸地方会; 2015 Nov 21-22; 富山.
- 23) 高千紘, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 岡澤成祐, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 松井祥子, 戸邊一之. 慢性呼吸器疾患におけるPhysical Activityの役割. 第75回呼吸器合同北陸地方会; 2015 Nov 21-22; 富山.
- 24) 南坂陽子, 神原健太, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 高千紘, 岡澤成祐, 猪又峰彦, 山田徹, 林龍二, 松井祥子, 戸邊一之. 特異な画像所見を呈した慢性好酸球性肺炎の一例. 第75回呼吸器合同北陸地方会; 2015 Nov 21-22; 富山.
- 25) 勢藤善大, 岡澤成祐, 田中宏明, 下川一生, 徳井宏太郎, 神原健太, 猪又峰彦, 山田徹, 三輪敏郎, 林龍二, 戸邊一之, 松井祥子. リンパ脈管筋腫症の後腹膜リンパ脈管筋腫にシロリムスが著効した1例. 第75回呼吸器合同北陸地方会; 2015 Nov 21-22; 富山.

#### 【その他】

- 1) 松井祥子. IgG4関連疾患の呼吸器診断基準. 厚生労働科学研究 難治性疾患克服研究事業 「IgG4関連疾患並びに治療指針の確立を目指した研究」平成26年度 総括・分担研究報告書 97-100.
- 2) 松井祥子. IgG4関連呼吸器疾患の治療と予後に関する研究. 厚生労働科学研究 委託費 難治性疾患等実用化研究事業 「IgG4関連疾患の病態解明と新規治療法の確立に関する研究」平成26年度 委託業務成果報告書 44-46.
- 3) 松井祥子. 呼吸器分科会報告. 厚生労働科学研究 難治性疾患克服研究事業 「IgG4関連疾患並びに治療指針の確立を目指した研究」班(千葉班)第1回班会議; 2015 Jan 9; 京都.
- 4) 松井祥子. IgG4関連疾患 呼吸器病変の病態と治療に関する調査研究. 厚生労働科学研究 委託費 難治性疾患等実用化研究事業 「IgG4関連疾患の病態解明と新規治療法の確立に関する研究」班(三森班)第1回班会議; 2015 Jan 10; 京都.
- 5) 松井篤, 朴木博幸, 山口智史, 篠田晃一郎, 多喜博文, 松井祥子, 戸邊一之. 汎血球減少症を併発したIgG4関連疾患の1例. 第8回IgG4研究会; 2015 Mar 21; 福岡.
- 6) 松井祥子, 山本 洋, 源 誠二郎, 半田

- 知宏, 早稲田優子, 三嶋理晃, 久保恵嗣. IgG4関連呼吸器疾患の病態と治療に関する調査研究. 第8回IgG4研究会; 2015 Mar 21; 福岡.
- 7) 松井祥子. No smoking campus プロジェクトメンバー養成研修会; 富山県厚生課; 2015 May 27; 富山
- 8) 松井祥子. 喫煙・飲酒・薬物乱用と健康. 青少年健康づくり支援事業 舟橋小学校; 2015 Jul 13; 富山.
- 9) 松井祥子. タバコと健康. 青少年健康づくり支援事業 早月中学校; 2015 Jul 14; 富山.
- 10) 松井祥子. タバコと健康. 滑川中学校; 2015 Jul 17; 富山.
- 11) 松井祥子. IgG4関連呼吸器疾患. 第2回検査と診療 関西フォーラム; 2015 Jul 25; 大阪.
- 12) 松井祥子. 特発性間質性肺炎とその最新医療について. 富山県難病相談・支援センター; 2015 Sept 12; 富山
- 13) 松井祥子. IgG4関連呼吸器疾患の呼吸器病変について. 第53回O.I.D. Conference; 2015 Oct 3; 大阪.
- 14) 松井祥子. アルコールハラスメントに気をつけて. 平成27年度第1回 富山大学学生団体講習会; 2015 Oct 7; 富山.
- 15) 松井祥子. 特発性肺線維症について～現状と今後の展望～. 日本ベーリンガーインゲルハイム社 社内研修会; 2015 Dec 21; 富山.
- 16) 松井祥子. IgG4関連疾患. 読売新聞 医療ルネッサンスNo.6199; 2015年12月1日
- 17) 松井祥子. IgG4関連呼吸器疾患と診断基準. Biotov 24号; 2015年4月; MBL医学生物学研究所.

## 西村 優紀美

### 【著書】

- 1) 西村優紀美 (2015) 大学における発達障害の学生に対するキャリア教育とキャリア支援、障害者問題研究43,(2). 全国障害者問題研究会, 91-98.
- 2) 西村優紀美 (2015) 青年期の発達障害とその支援, そだちの科学. 日本評論社, 82-86.
- 3) 西村優紀美 (2015) 障害児・者の教育保障の取り組みとその課題, 社会福祉研究, 公益財団法人鉄道弘済会, 28-29.
- 4) 西村優紀美 (2015) 発達障がいのある学生の包括的支援のあり方, CAMPUS HEALTH52 (2)40-45.
- 4) 西村優紀美: 発達障害学生へのナラティブアプローチ. 愛媛大学発達障害学生支援セミナー. 2015.3.18. 愛媛.
- 5) 西村優紀美: 大学における支援の実際～自己理解を促進する支援のあり方. 自閉症啓発デー in 横浜. 2015.3.28. 神奈川.
- 6) 西村優紀美: 発達障害のある学生への対応について. 城西大学薬学部. 2015.4.18. 埼玉.
- 7) 西村優紀美: 修学上の課題を有する学生への支援方法と課題～発達障害の特性を踏まえた対応の在り方と問題点～. 内閣府認定特定非営利活動法人学生文化創造主催. 2015.5.21. 東京.

### 【学会, 研究会等における学術講演】

- 1) 西村優紀美: 発達障害のある学生の進路指導・就労支援の取り組み (大学編) 発達障害者の就労支援セミナー. 厚生労働省平成26年度障害者就労支援者育成事業【北陸ブロック】. 2015.1.27. 富山.
- 2) 西村優紀美: コミュニケーションの困難さへの包括的支援～発達障がいに対するナラティブ・アプローチと「支援の見える化」～. 静岡市こころの健康センター主催静岡学生支援実践研究集会. 2015.2.16. 静岡.
- 3) 西村優紀美: 発達障害のある若者の生きづらさ～大学における支援を通して見えてくるもの～. 石川県発達障害者支援センター主催「若者の生きづらさを考える」. 2015.2.28. 石川.
- 8) 西村優紀美: 発達障害のある子ども・平成27年度児童思春期精神保健専門研修会 2015.7.2. 富山.
- 9) 西村優紀美: 高等教育機関における障害学生支援－発達障害のある学生への合理的配慮について. 富山県立大学FD研修会. 2015.11.2. 富山.
- 10) 西村優紀美: 発達障害のある学生への支援の在り方について. 大阪保健医療大学 2015. 11.10. 大阪.
- 11) 西村優紀美: 発達障害特性のある学生への支援. 群馬県発達支援センター. 2015.11.14. 群馬.
- 12) 西村優紀美: 発達障がい学生への修学支援. 新潟大学教育戦略フォーラム. 2015.11.24. 新潟.



## 竹 澤 みどり

## 【学会発表】

- 1) 竹澤みどり・松井めぐみ 2015 情報通信技術 (ICT) を用いた交際相手への暴力 (IPV) 一尺度作成および性別・遠距離恋愛との関連— 日本健康心理学会第28回大会, PW09.
- 2) 竹澤みどり・松井めぐみ 情報通信技術 (ICT) を用いた交際相手への暴力 (IPV) 一自己愛と関係不安との関連— 日本心理学会第79回大会, 1AM-006.
- 3) 宮前淳子・竹澤みどり・宇井美代子・寺島瞳・松井めぐみ 2015 心理的暴力被害経験尺度の作成 包括的IPV尺度の構築に向けて (1) 日本心理学会第79回大会, 3AM-033.
- 4) 松井めぐみ・寺島瞳・宇井美代子・竹澤みどり・宮前淳子 2015 心理的暴力被害経験尺度の作成 包括的IPV (Intimate partner violence) 尺度の構築に向けて (2) 日本心理学会第79回大会, 3AM-034.
- 5) 寺島瞳・宮前淳子・松井めぐみ・竹澤みどり・宇井美代子 2015 心理的暴力被害経験尺度の作成 包括的IPV (Intimate partner violence) 尺度の構築に向けて (3) 日本心理学会第79回大会, 3AM-035.

## 【講演その他】

- 1) 竹澤みどり 「うつについて」講師 富山大学理学部FD研修会 2015.7.8.

## 杉谷キャンパス

|            |         |                |
|------------|---------|----------------|
| 教 授 ( 併 )  | 北 島 勲   | Isao Kitajima  |
| 准 教 授      | 岩 田 実   | Iwata Minoru   |
| 看 護 師      | 高 倉 一 恵 | Kazue Takakura |
| 看 護 師      | 野 口 寿 美 | Hitomi Noguchi |
| 臨 床 心 理 士  | 酒 井 涉   | Wataru Sakai   |
| 臨床心理士(非常勤) | 佐 野 隆 子 | Takako Sano    |

## 【原 著】

- 10) Sakai K, Imamura M, Tanaka Y, Iwata M, Hirose H, Kaku K, Maegawa H, Hirotaka Watada H, Tobe K, Kashiwagi A, Kawamori R, Maeda S. Replication study for the association of rs7578597 in THADA, rs10886471 in GRK5 and rs7403531 in RASGRP1 with susceptibility to type 2 diabetes in a Japanese population. *Diabetology International* 2015 Dec;6(4):306-312.
- 11) Hayashikawa Y, Iwata M, Inomata M, Kawagishi Y, Tokui K, Taka C, Kambara K, Okazawa S, Yamada T, Hayashi R, Kamura Y, Okazawa T, Matsui S, Kigawa M, Tobe K. Association of serum adiponectin with asthma and pulmonary function in the Japanese population. *Endocr J.* 2015 May;62(8):695-709.
- 12) Matsuba R, Sakai K, Imamura M, Tanaka Y, Iwata M, Hirose H, Kaku K, Maegawa H, Watada H, Tobe K, Kashiwagi A, Kawamori R, Maeda S. Replication Study in a Japanese Population to Evaluate the Association between 10 SNP Loci, Identified in European Genome-Wide Association Studies, and Type 2 Diabetes. *PLoS One.* 2015 May 7;10(5):e0126363.

## 【総説】

- 1) 岩田 実, 戸辺一之. インスリン分泌能を評価

する新しい指標：Cペプチドインデックス, *SUIT 日本医事新報社*2015; 4772(10月10日号):47

## 【学会報告】

- 1) M, Imamura, S. Maeda, T. Yamauchi, K. Hara, M. Iwata, H. Hirose, K. Yasuda, H. Watada, H. Maegawa, C. Ito, Y. Tanaka, K. Tobe, K. Kaku, R. Kawamori, T. Kadowaki. A meta-analysis of Japanese genome-wide association studies identified seven novel susceptibility loci to type 2 diabetes. 51th Annual Meeting of the European-Association-for-the-Study-of-Diabetes; 2015 Sep14-18; Stockholm.
- 2) M, Imamura, S. Maeda, T. Yamauchi, K. Hara, A Takahashi, M Kubo, M. Iwata, H. Hirose, K. Yasuda, H. Watada, H. Maegawa, C. Ito, Y. Tanaka, K. Tobe, K. Kaku, R. Kawamori, M Kasuga, T Kadowaki. A Meta-analysis Of Japanese Genome-wide Association Studies Identified Seven Novel Susceptibility Loci To Type 2 Diabetes. 75th Scientific Sessions American Diabetes Association; 2015 Jun 5-9; Boston.
- 3) 岩田 実, 前田 士郎, 加村 裕, 高野 敦子, 村上 史峰, 加藤 弘巳, 福島 泰男, 樋口 清博, 赤川 直次, 手丸 理恵, 浅水 幸恵, 新村 里美, 朴木 久恵, 小清水 由紀子, 石木 学, 福田 一仁, 薄 井 勲, 戸辺 一之. FTO 遺伝子多型は最大既

- 往BMIを介して2型糖尿病発症に関連する。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 4) 松葉 怜, 今村 美菜子, 岩田 実, 広瀬 寛, 綿田 裕孝, 前川 聡, 戸辺 一之, 柏木 厚典, 加来 浩平, 河盛 隆造, 田中 逸, 前田 士郎 多人種ゲノムワイド関連解析の大規模メタ解析により同定された新規2型糖尿病感受性領域6領域の日本人集団での検証。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 5) 岩田 実, 新村里美, 朴木久恵, 小清水由紀子, 中嶋 歩, 岡部圭介, 角 朝信, 渡辺善之, 瀧川章子, 石木 学, 薄井 勲, 戸辺一之, 工藤 浩, 黒木嘉人, 西原永潤, 加村 裕, 岡澤光代 バセドウ病の経過中にIgG4甲状腺炎の合併が考えられた一例。第58回日本甲状腺学会学術集会, 2015, 11, 5-7, 福島。
- 6) 石木 学, 西田康宏, 瀧川章子, 岡部圭介, 角 朝信, 小清水由紀子, 岩田 実, 薄井 勲, 戸邊一之。強力な抗 勲, 戸邊一之。強力な抗酸化剤アスタキサンチの in vivoにおける糖代謝への影響。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 7) 小清水由紀子, 薄井 勲, 中嶋 歩, 新村里美, 角 朝信, 岡部圭介, 瀧川章子, 仙田聡子, 朴木久恵, 福田一仁, 石木 学, 岩田 実, 戸邊一之。妊娠糖尿病に対しインスリン治療を必要とした症例の臨床的特徴に関する検討。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 8) 朴木久恵, 小清水由紀子, 中嶋 歩, 新村里美, 角 朝信, 岡部圭介, 瀧川章子, 仙田聡子, 石木 学, 岩田 実, 福田一仁, 薄井 勲, 戸邊一之。リラグルチドの併用療法によるインスリン必要量の減量効果に関する検討。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 9) 中嶋 歩, 角 朝信, 福田一仁, 新村里美, 岡部圭介, 瀧川章子, 朴木久恵, 小清水由紀子, 岩田 実, 石木 学, 薄井 勲, 戸邊一之。強化インスリン療法後の治療選択におけるグルカゴン負荷試験や CPI の有用性の検討。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 10) 新村里美, 小清水由紀子, 石木 学, 中嶋 歩, 朴木久恵, 岡部圭介, 瀧川章子, 福田一仁, 岩田 実, 薄井 勲, 戸邊一之。血糖コントロールに難渋している抗インスリン抗体陽性糖尿病の1例。第58回日本糖尿病学会年次学術集会, 2015, 5, 21-24, 山口。
- 11) 西田康宏, 石木 学, 瀧川章子, 岡部圭介, 角 朝信, 小清水由紀子, 岩田 実, 薄井 勲, 戸邊一之。緑藻由来 アスタキサンチンの高脂肪食肥満マウスにおける作用。第36回日本肥満学会; 2015 10, 2-3, 名古屋。

#### 【その他】

- 13) 岩田 実。糖尿病の治療薬について。富山県女性薬剤師会学術講演会; 2015Sep 6; 富山
- 14) 岩田 実。経口血糖降下薬の使い方と、インスリン治療選択のためのインスリン分泌指標の使い方について。Metformin Seminar in Niikawa; 2015 Feb 19; 魚津
- 15) 岩田 実。新しい糖尿病治療薬の使用経験と、インスリン治療選択のための各種インスリン分泌指標の有用性について。糖尿病治療講演会; 2015 Apr 13; 糸魚川

## 高岡キャンパス

|              |       |                  |
|--------------|-------|------------------|
| 支所長(併任)      | 立浪 勝  | Masaru Tachinami |
| 内科医(准教授)     | 中川 圭子 | Keiko Nakagawa   |
| 看護師          | 宮田 留美 | Rumi Miyata      |
| 臨床心理士(非常勤)   | 柴野 泰子 | Yasuko Shibano   |
| 精神保健福祉士(非常勤) | 橋本 順子 | Junko Hashimoto  |
| 臨床心理士(非常勤)   | 大浦 暢子 | Nobuko Oura      |
| 臨床心理士(非常勤)   | 小倉悠里子 | Yuriko Ogura     |

## 中川圭子

## 【原著】

- 1) Nakagawa K, Hirai T, Ohara K, Fukuda N, Numa S, Taguchi Y, Dougu N, Takashima S, Nozawa T, Tanaka K, Inoue H. Impact of persistent smoking on long-term outcomes in patients with nonvalvular atrial fibrillation. *J Cardiol* 2015;65:429-33.

## 【学会報告】

- 1) Kyoko Inao, Tadakazu Hirai, Shuhei Tanaka, Satoshi Numa, Kazumasa Ohara, Nobuyuki Fukuda, Keiko Nakagawa, Hiroshi Inoue. Functional improvement of left atrial appendage in patients with paroxysmal atrial fibrillation. 第79回日本循環器学会学術集会, 2015, 4, 24-26, 大阪.
- 2) Kyoko Inao, Tadakazu Hirai, Keiko

Nakagawa, Satoshi Numa, Kazumasa Ohara, Nobuyuki Fukuda, Hiroshi Inoue. Stroke risk associated with environmental tobacco smoke among patients with atrial fibrillation. 第79回日本循環器学会学術集会, 2015, 4, 24-26, 大阪.

- 3) Nobuyuki Fukuda, Shuhei Tanaka, Kyoko Inao, Keiko Nakagawa, Tadakazu Hirai, Hiroshi Inoue. Severe mitral regurgitation reduces thromboembolic events in patients with atrial fibrillation. 第79回日本循環器学会学術集会, 2015, 4, 24-26, 大阪.

## 【その他】

- 1) 中川圭子:「タバコの害と禁煙」について. 大島小学校, 2015, 12, 17, 射水.

